榛原町内遺跡発掘調査概要報告書　1991年度

榛原町文化財調査概要　8

１９９２

榛 原 町 教 育 委 員 会

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書　1991年度

榛原町文化財調査概要　8

１９９２

榛 原 町 教 育 委 員 会

序

奈良県の東方に位置する榛原町は、古くから交通の要衝として重要な位置にあり、町内各所に多くの文化財が存在しています。当委員会では、各種文化財の調査を計画・実施しており、本書は下井足カワタ遺跡と戒場遺跡の各発掘調査概要をまとめたものです。

いずれも小規模な発掘調査ではありましたが、下井足カワタ遺跡では弥生時代から中世の遺物・遺構を検出することができました。また、戒場遺跡では平安時代末葉から中世の建物遺構や遺物を確認することができました。本書が今後の調査・研究に資するところがあれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際して、ご協力・ご援助を賜りました奈良県教育委員会をはじめ関係諸機関ならびに地元関係各位に厚くお礼申しあげますと共に今後とも一層の御指導、御援助の程よろしくお願い申しあげます。

平成４年３月

榛原町教育委員会

教育長　山　尾　正　弘

例　　言

1　本書は、奈良県宇陀郡榛原町内に所在する「榛原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（榛原町文化財調査概要８）で、下井足カワタ遺跡・戒場遺跡の各発掘調査概要を収録している。

2　調査は、平成３年度（1991年度）国庫補助事業・県費補助事業として榛原町教育委員会が実施し、平成３年９月１日に着手し、平成４年３月31日に終了した。

3　現地調査は、奈良県教育委員会の指導のもと榛原町教育委員会技師　柳澤一宏が担当した。

4　調査組織および関係者は、各本文中に詳しい。

5　各遺跡の調査記録、遺物等は榛原町教育委員会において保管している。

6　本書の執筆・編集は、柳澤が担当した。

目　　次

Ⅰ　埋蔵文化財発掘調査の概要 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 3
　1　地理的環境 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3
Ⅲ　下井足カワタ遺跡発掘調査概要 …… 9
　1　調査の契機と経過 …… 9
　　(1)　調査の契機と経過 …… 9
　　(2)　現地調査日誌抄 …… 9
　2　位置と環境 …… 10
　3　遺跡の調査 …… 13
　　(1)　調査区と基本土層 …… 13
　　(2)　検出遺構 …… 16
　　(3)　出土遺物 …… 18
　4　ま　と　め …… 20
　5　抄　　録 …… 20
Ⅳ　戒場遺跡発掘調査概要 …… 21
　1　調査の契機と経過 …… 21
　　(1)　調査の契機と経過 …… 21
　　(2)　現地調査日誌抄 …… 21
　2　位置と環境 …… 25
　3　遺跡の調査 …… 25
　　(1)　調査区と基本土層 …… 25
　　(2)　検出遺構 …… 27
　　(3)　出土遺物 …… 35
　4　ま　と　め …… 42
　5　抄　　録 …… 42

Ⅰ　埋蔵文化財発掘調査の概要

榛原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為にともなう埋蔵文化財の発掘調査が本格的に行われており、その件数は増加傾向にある。今後も町内各所で多くの開発行為が計画されており、埋蔵文化財の取り扱い等について協議を重ねているところである。

当委員会が扱った1991年度（平成３年度）の発掘届・通知、発掘調査等は表１・２のとおりである。これらのうち、本書には下井足カワタ遺跡、戒場遺跡の各発掘調査概要を収録している。

表１　発掘届・発掘調査件数等一覧表

摘要＼年度	1987	1988	1989	1990	1991
発掘調査届　（民間）	3	2	0	4	~~3~~4
発掘調査通知（公共）	6	13	6	9	4
遺跡踏査願	1	4	3	4	2
発掘調査（町教委担当）	4	4	3	7	7
立会調査（町教委担当）	2	3	1	0	0

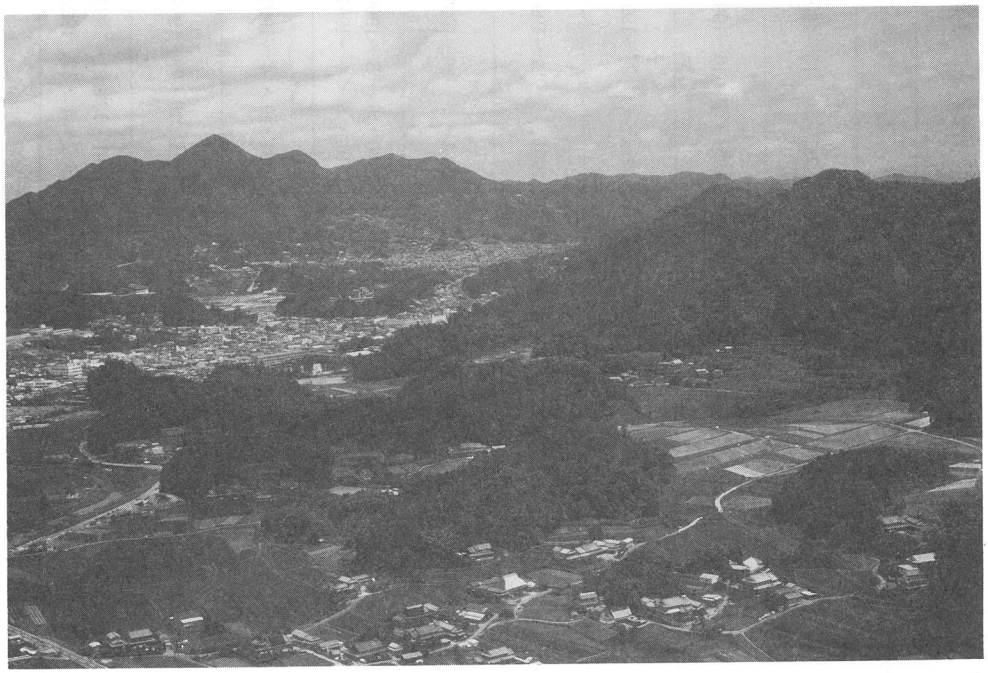


写真１　榛原の市街地遠望

表2　１９９１年度発掘調査地等一覧表

番号	榛原町遺跡番号	遺跡名	調査地	現地調査期間	調査原因（原因者）	調査概要 遺構	調査概要 遺物	備考
1	1－113	萩原西高田遺跡（はぎはらにしたかだ）	榛原町萩原	1991・4・15～1991・5・10	宅地造成工事（三和相互㈱）	土坑（土壙）24	土師器、陶磁器、鉄釘、銭貨	榛原町文化財調査概要7
2	1－24	萩原前川遺跡（はぎはらまえがわ）	榛原町萩原	1991・6・10～1991・6・12	共同住宅新築工事（松塚建設㈱）	なし	サヌカイト片、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器	
3	4－23	八滝長坂遺跡（やだきながさか）	榛原町八滝	1991・6・25～1991・7・2	農地造成工事（榛原町）	なし	弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器	
4	2－60	下井足城山古墳群（しもいだにしろやま）	榛原町下井足	1991・5・21～1991・8・13	町道拡幅工事（榛原町）	古墳3基、土坑、ピット	サヌカイト片、須恵器、土師器、鉄鎌、鉄刀子、瓦器、銭貨	
5	1－115	萩原狐ヅカ遺跡（はぎはらきつねづか）	榛原町萩原	1991・7・30～1991・8・23	宅地造成工事（三晃住宅㈱ほか）	なし	土師器、鉄釘、銭貨	
6	1－100	下井足カワタ遺跡（しもいだにかわた）	榛原町下井足	1990・8・8～1990・8・22 1991・9・4～1991・9・30	道路新設工事（榛原町）	溝	須恵器、土師器、鉄釘	
				1991・9・4～1991・9・30	農地造成工事（個人）	土坑、溝、ピット	サヌカイト片、須恵器、土師器、鉄釘	本報告
7	3－1・2	戒場遺跡（かいば）	榛原町戒場	1991・10・23～1991・12・6	農地造成工事（榛原町）	掘立柱建物跡、溝、土坑、ピット	サヌカイト片、須恵器、土師器、瓦器	本報告
8	2－283～285	行者山古墳群（ぎょうじゃやま）	榛原町笠間	1991・12・21～1991・12・26 1992・1・12、1992・1・20	（測量調査）	前方後円墳1基、円墳2基		榛原町文化財調査概要7

II　位置と環境

1　地理的環境

奈良県の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、大宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曽爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「ロ宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。ロ宇陀は標高 300 m～ 400 mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、ロ宇陀盆地とも称され、大宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀山地とも呼称されている。

ロ宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の四周は概ね標高約 400 m～ 800 m の山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とをわける額井岳、香酔山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半はロ宇陀、東半は奥宇陀的な様相を呈している。

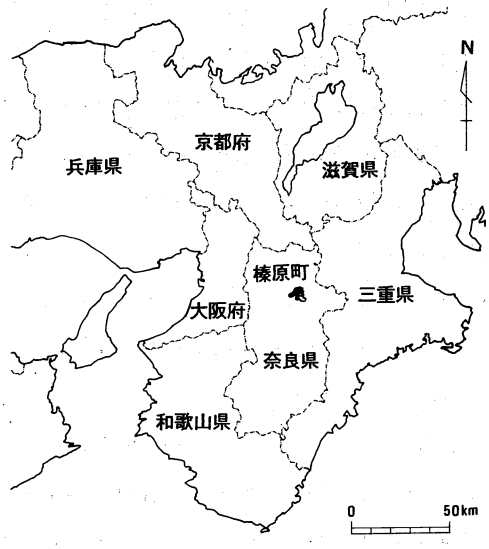


図１　榛原町位置図

2　歴史的環境

宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献にも度々登場し、軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名、伝承等も多い。

榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるにしたがって、その数も増加している。

これまでに、町内では３点の有舌尖頭器が出土している。これらの時期は、旧石器時代末期から縄文草創期に求めることができ、この頃が宇陀の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発

掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで、遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は数少ないが、後期に属するものは比較的多く確認している。これらは、地理的制約のためか、奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である方形台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峠遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。この頃の集落としては、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、谷遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や竪穴式住居跡などが確認されている。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山１号墳、シメン坂１号墳、前山１号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。５世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。６世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峠古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した将軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には宇陀においても荘園の開発が急速に進み、このなかで、台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城・沢城・芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峠遺跡群、八咫烏遺跡群、野山遺跡群などが知られている。

（参考文献等省略）

表３　榛原町遺跡分布図（図２）対照表

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	備考
1	鳥見山中腹遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	縄文～弥生	一部削平
2	岩尾火葬墓	榛原町萩原	火葬墓	奈良	
3	南山古墳	榛原町萩原	円墳(磚積石室)	古墳後	
4	清水谷遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	弥生～古墳、中世	
5	天の森遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	縄文～弥生、中世	
6	西峠古墳	榛原町萩原	円墳(磚積石室)	古墳後	
7	萩原前川遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	弥生、古墳、中世	
8	萩原西高田遺跡	榛原町萩原	近世墓	江戸	
9	萩原狐ヅカ遺跡	榛原町萩原	遺物散布地、近世墓？	江戸	
10	キトラ遺跡	榛原町萩原	方形台状墓、中世墓	古墳前、中世	
11	谷畑中世墓地	榛原町萩原	中世墓地	室町	
12	谷畑古墳・神木坂古墳群	榛原町萩原	円墳(木棺)、方墳(横穴式石室、磚積石室)	古墳前・後	
13	奥ノ芝古墳群 福地城跡遺跡	榛原町福地	円墳(木棺、磚積石室)、住居跡、城跡	古墳前・後 中世	1･2号墳県史跡(1985年､1号墳は宅地造成工事で破壊)
14	長峰古墳群	榛原町長峰	円墳群	古墳	
15	北谷古墳群	榛原町福地	前方後円墳・円墳(横穴式石室)	古墳後	
16	不動堂古墳群	榛原町檜牧	円墳(横穴式石室)	古墳後	
17	石風呂古墳	榛原町檜牧	円墳(横穴式石室)	古墳後	
18	石風呂遺跡	榛原町檜牧	遺物散布地	縄文、古墳、中世	
19	丹切遺跡	榛原町萩原・下井足	遺物散布地	縄文～中世	
20	丹切古墳群	榛原町萩原・下井足	円墳(木棺直葬、横穴式石室)ほか	古墳後	
21	下井足カワタ遺跡	榛原町下井足	遺物散布地	弥生、古墳後、奈良	本報告
22	下井足古墳群	榛原町下井足	方形台状墓、円墳ほか	古墳前～後	城山古墳群、谷古墳群、下井足古墳群
23	井足城跡	榛原町下井足	城跡	中世	
24	愛宕山古墳	榛原町上井足	円墳(石室)	古墳後	谷支群
25	谷遺跡	榛原町上井足	集落跡	弥生～古墳	
26	能峠遺跡群	榛原町上井足	方形台状墓､円墳､小型横穴式石室､集落跡､城跡､中世墓地ほか	縄文～江戸	北山地区､南山地区､西山地区、中島地区
27	上井足ワラ田古墳	榛原町上井足	円墳、竪穴系横口式石槨２、箱形木棺	古墳後	
28	前山１号墳	榛原町上井足	円墳(割竹形木棺)	古墳中	
29	上井足北出遺跡	榛原町上井足	集落跡	縄文～中世	
30	高田垣内遺跡群	榛原町上井足	集落跡、前方後円墳、円墳、方墳、墳墓ほか	縄文草、弥生～江戸	
31	大王山遺跡群	榛原町下井足・篠楽	住居跡、方形台状墓、前方後円墳､円墳､中世墓､寺跡ほか	弥生～江戸	
32	篠楽アサマ遺跡	榛原町篠楽	遺物散布地、中世墓	弥生～古墳、中世	
33	ダケ古墳	榛原町雨師	前方後円墳(竪穴式石室)	古墳後	
34	澤ノ坊２号墳	榛原町笠間	前方後円墳	古墳前～中	
35	石榴垣内遺跡群	榛原町笠間	集落跡、古墳	古墳～鎌倉	
36	行者山古墳群	榛原町笠間	前方後円墳、円墳	古墳	
37	池上遺跡	榛原町池上	遺物散布地	弥生後	
38	仮称池上東遺跡	榛原町池上	遺物散布地	弥生中～後	
39	高山古墳群	榛原町池上	方墳(割竹形木棺)	古墳中	
40	灌頂寺跡	榛原町福西	寺跡、墓地	中世	八咫烏遺跡群

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	備考
41	福西城跡	榛原町福西	城跡	中世	
42	高塚遺跡	榛原町高塚	遺物散布地(集落跡)	弥生～古墳、中世	
43	栗谷尾尻古墳群	榛原町栗谷	円墳(木棺直葬)	古墳後	
44	栗谷トノヤシキ遺跡群	榛原町栗谷	円墳(木棺直葬)、集落跡、中世墓	古墳後、中世	
45	三角遺跡	榛原町栗谷	遺物散布地(集落跡)	縄文～弥生、中世	
46	石田1号墳	榛原町石田	円墳？(横穴式石室)	古墳後	
47	鳥羽1号墳	榛原町石田	円墳　(小型横穴式石室)	古墳後	
48	澤城跡	榛原町大貝・澤	城跡	中世	
49	文祢麻呂墓	榛原町八滝	墳墓	奈良	国史跡
50	大貝ヒジキ山遺跡	榛原町大貝	遺物散布地(集落跡)	縄文晩～古墳後、中世	
51	大貝古墳群	榛原町大貝	円墳(横穴式石室)	古墳後	
52	澤古墳群	榛原町澤	円墳(割竹形木棺)	古墳中～後	
53	澤遺跡	榛原町澤	遺物散布地(集落跡)	縄文後～古墳後、中世	
54	下城・馬場遺跡	榛原町澤	遺物散布地(集落跡)	縄文後～古墳後、中世	
55	野山遺跡群 戸石・辰巳前遺跡	榛原町澤	方形台状墓、前方後円墳、円墳、中世墓、寺跡、	古墳前～江戸	
56	戒場遺跡	榛原町戒場	遺物散布地、寺跡？	縄文、平安～室町	本報告
57	伝山部赤人墓	榛原町山辺三	墳墓？(鎌倉時代の五輪塔)	鎌倉	
58	山辺城跡群	榛原町山辺三	城跡	中世	
59	篠畑神社前遺跡	榛原町山辺三	遺物散布地	縄文、中世	大半破壊
60	仮称赤瀬古墳群	榛原町赤瀬	円墳(横穴式石室)	古墳後	
61	檜牧遺跡	榛原町檜牧	遺物散布地	縄文早、鎌倉	
62	西谷古墳群	榛原町檜牧	円墳(横穴式石室)	古墳後	
63	檜牧城跡	榛原町檜牧	城跡	中世	
64	高井遺跡	榛原町高井	集落跡	縄文早～後、奈良～中世	
65	赤埴下志明遺跡	榛原町赤埴	住居跡	縄文、中世	
66	赤埴上俵遺跡	榛原町赤埴	遺物散布地(集落跡)	縄文、平安～中世	
67	赤埴城跡	榛原町赤埴	城跡	中世	上城
68	諸木野城跡	榛原町諸木野	城跡	中世	
69	八滝長坂遺跡	榛原町八滝	遺物散布地	縄文、中世	
70	内牧カラト遺跡	榛原町内牧	遺物散布地、祭祀遺跡？	縄文、奈良	
71	仮称滝谷遺跡	榛原町内牧	(有舌尖頭器採集)	縄文草	
a	墨坂神社	榛原町萩原			
b	宇太水分神社	榛原町下井足	式内社		
c	椋下神社	榛原町福地	式内社		
d	丹生神社	榛原町雨師	式内社		
e	八咫烏神社	榛原町高塚	式内社		
f	都賀那岐神社	榛原町山路	式内社		
g	篠畑神社	榛原町山辺三			
h	御井神社	榛原町檜牧	式内社		
i	味坂比売命神社	榛原町荷坂	式内社		

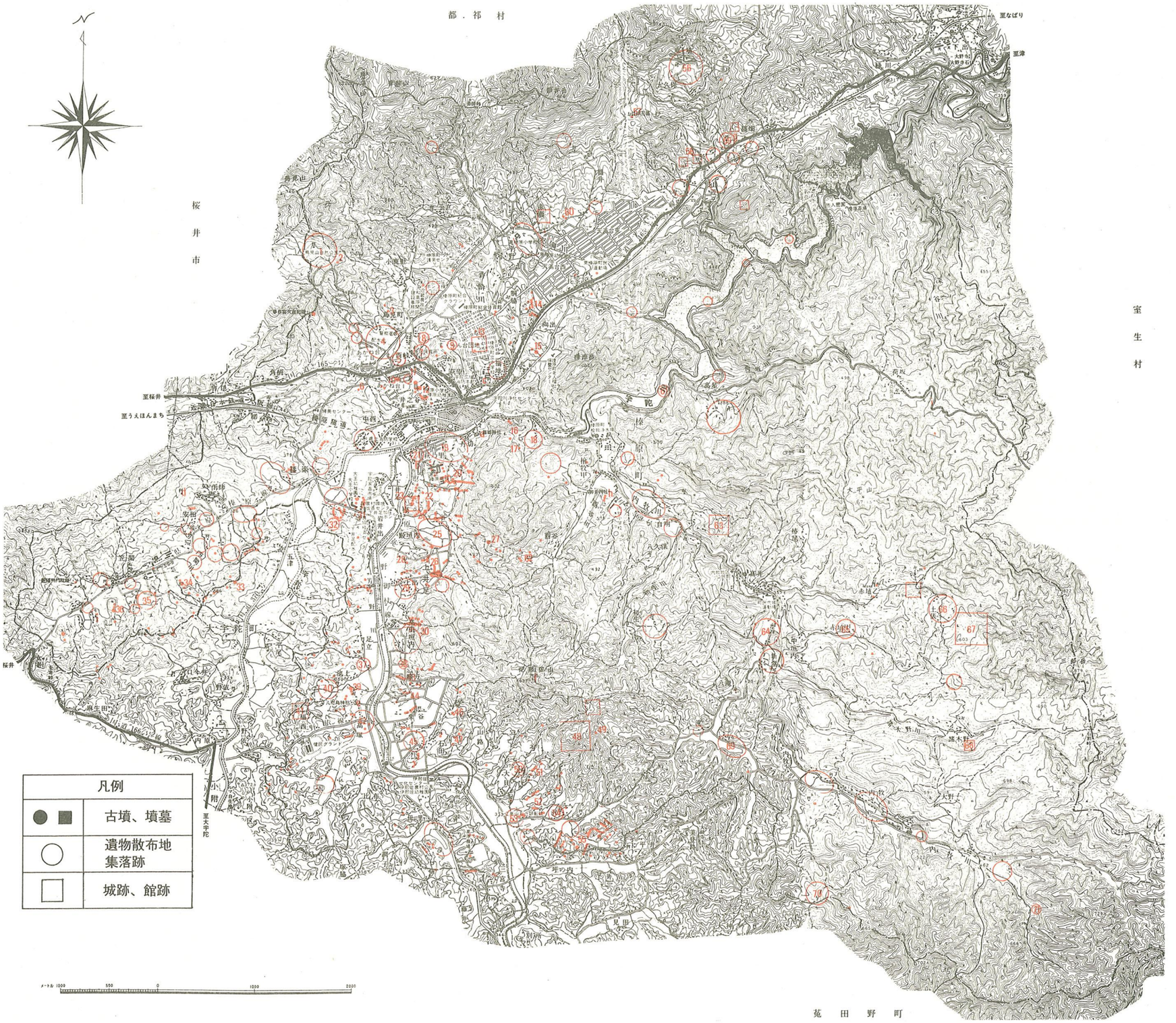

都．祁村
桜井市
室生村
菟田野町
至なばり
至津
至桜井
至うえほんまち
至大宇陀
凡例
古墳、墳墓
遺物散布地
集落跡
城跡、館跡

図２　榛原町遺跡分布図

III　下井足カワタ遺跡発掘調査概要

1　調査の契機と経過

(1)　調査の契機と経過

本遺跡は、1986年の踏査段階では古墳時代～中世にかけての遺物散布地（榛原町遺跡番号１－100）として確認していたものである。

1990年にこの遺跡を中心として東西方向の道路が新設される計画が明らかとなったため、関係機関等が協議を行ったところ、まず、遺跡の範囲等を明らかにする確認調査を実施することとなった。確認調査は、同年８月８日から８月22日にかけて２箇所のトレンチ調査にて行い、溝・ピット等の遺構、サヌカイト・土師器・須恵器等の遺物を検出し、これらがさらに広がっている可能性も考えられた。また、道路予定地に隣接する地区が個人農地として造成される計画もあったため、道路敷地内と農地造成地内とをそれぞれ発掘調査し、遺跡の状況を把握する必要があった。

事業者である榛原町役場からは1991年７月26日付けで改めて、埋蔵文化財発掘調査通知書、個人から1991年８月８日付けで埋蔵文化財発掘調査届出書がそれぞれ提出され、今回の発掘調査となったものである。現地調査（２次調査）は1991年９月４日から1991年９月30日にかけて実施し、その後、整理作業に移り、1992年３月31日に本事業を終えた。

遺跡名は大字名と小字名から「下井足（しもいだに）カワタ遺跡」とし、本書には、個人農地造成地内（第１トレンチ）での発掘調査概要を収録している。

調査関係者等は下記のとおりである。

調　査　主　体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会　社会教育課（課長　尾上博美）
調査担当者	榛原町教育委員会　社会教育課　技師　柳澤一宏
調査補助員	井上好美、森塚和彦、山本美恵子、本村充保
調査作業員	池田圭子、棚田幸子、中谷喜代子、松村幸代、柳沢雅子
調　査　指　導	奈良県教育委員会　文化財保存課
航空写真撮影	株式会社岡本組、株式会社パスコ
調　査　協　力	萩乃里自治会、榛原町役場同和対策課、福島善一、福島隆雄

(2)　現地調査日誌抄

1991年（平成３年）

９月４日（水）
２次調査の開始。器材搬入。掘り下げ開始。

９月５日（木）～９月11日（水）
掘り下げ作業、遺構検出作業。

９月12日（木）・９月18日（水）
掘り下げ作業、遺構実測。

９月20日（金）・９月24日（火）
遺跡実測、平板測量。

９月25日（水）・９月26日（木）
遺構検出作業、遺構実測、写真撮影。

９月30日（月）
航空写真撮影、器材搬出。

2　位置と環境

調査地は、榛原の市街地の南辺部にあたり、井足岳から北方にのびる標高約320～330ｍの一尾根先端部に位置する。周辺は様々な開発により以前の景観とは、趣を異にしているものの、北方には榛原の街並、屏風状にならぶ大和富士をはじめとする当地の高峰を望める。

下井足カワタ遺跡と同一尾根上には北から順に式内社の宇太水分神社、下井足城山古墳群、井足城跡などが位置する。また周辺では丹切古墳群、下井足遺跡群、谷遺跡をはじめ、多くの遺跡の発掘調査が行われており、この遺跡は芳野川・宇陀川右岸の遺跡密集地の一角を構成している(図2･3)。

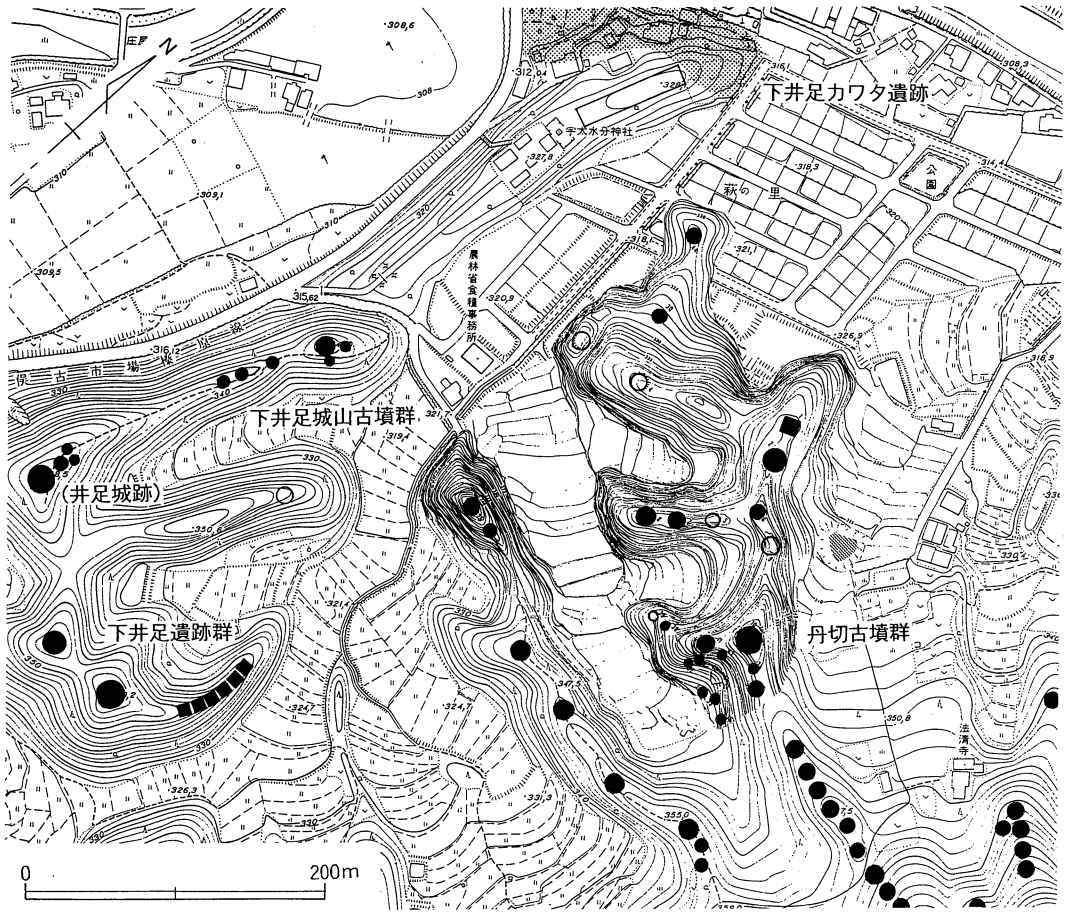


図３　下井足カワタ遺跡位置図

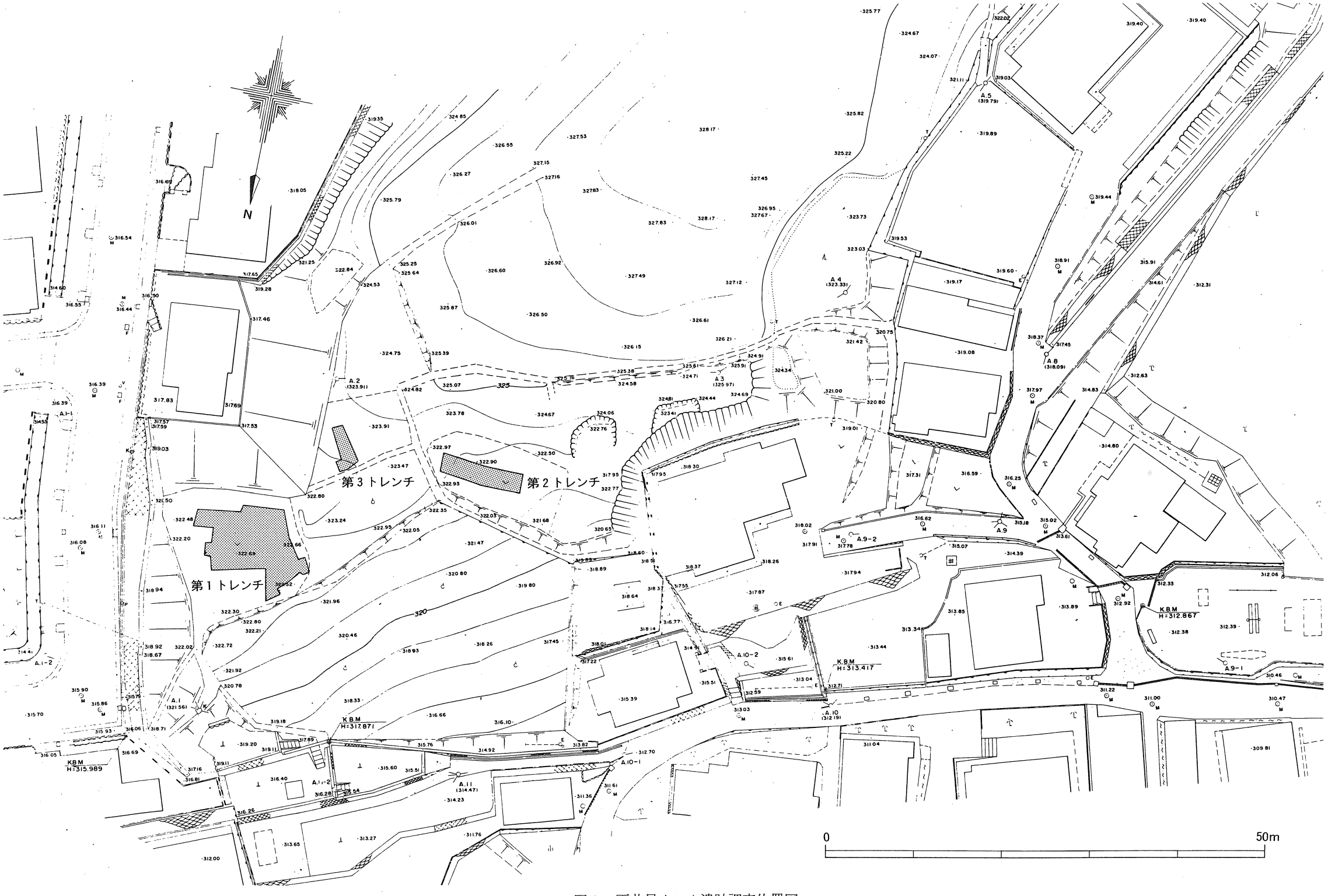


図4　下井足カワタ遺跡調査位置図

3　遺跡の調査

(1)　調査区と基本土層

１次調査地（第１トレンチ）北側が今回の調査区となっており、前回と同様、１トレンチと呼称している。なお、調査区は、これまでの土地利用等の制約から不規則な調査範囲となっている（図

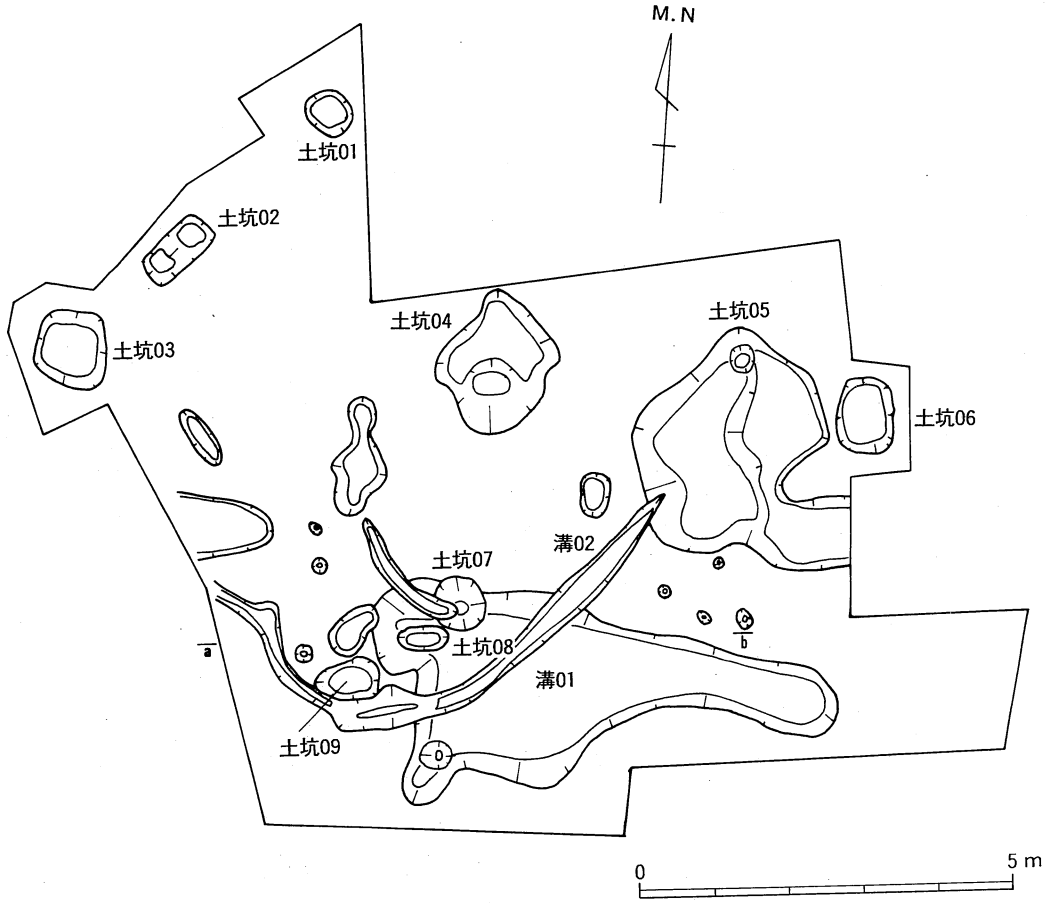


図５　下井足カワタ遺跡第１トレンチ遺構平面図

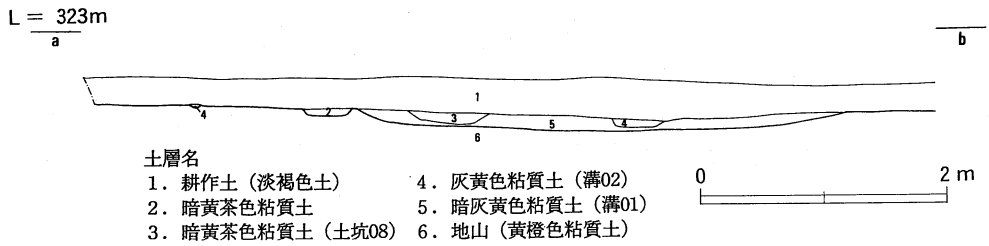


図６　下井足カワタ遺跡第１トレンチ土層断面図

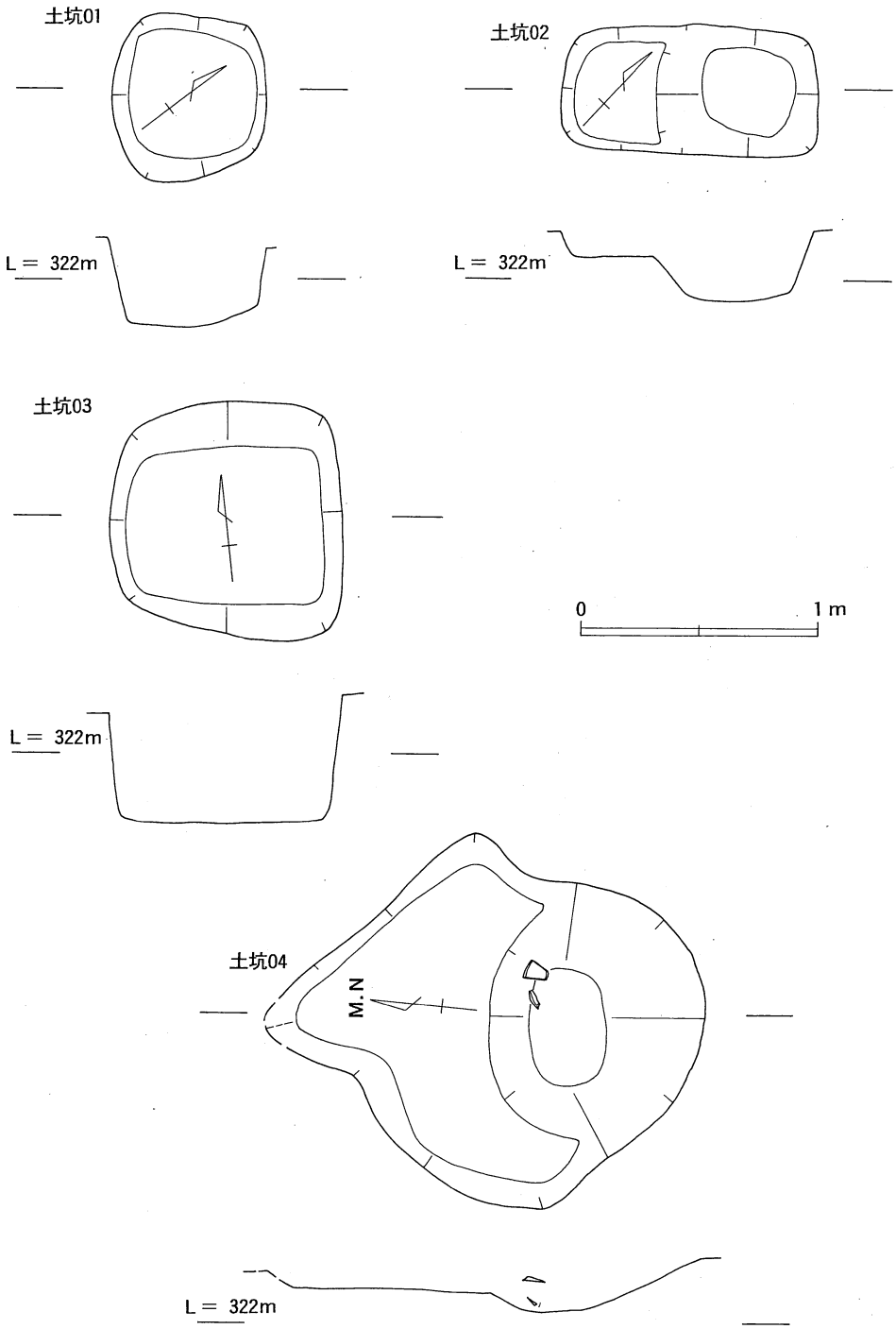


図７　下井足カワタ遺跡土坑01～04実測図

4・5）。淡褐色の耕作土（第1層）を堀り下げると、ほどなく黄橙色粘質土の地山面（遺構面）を検出し、地表からこの面までの深さは約20cmと比較的浅い（図6）。

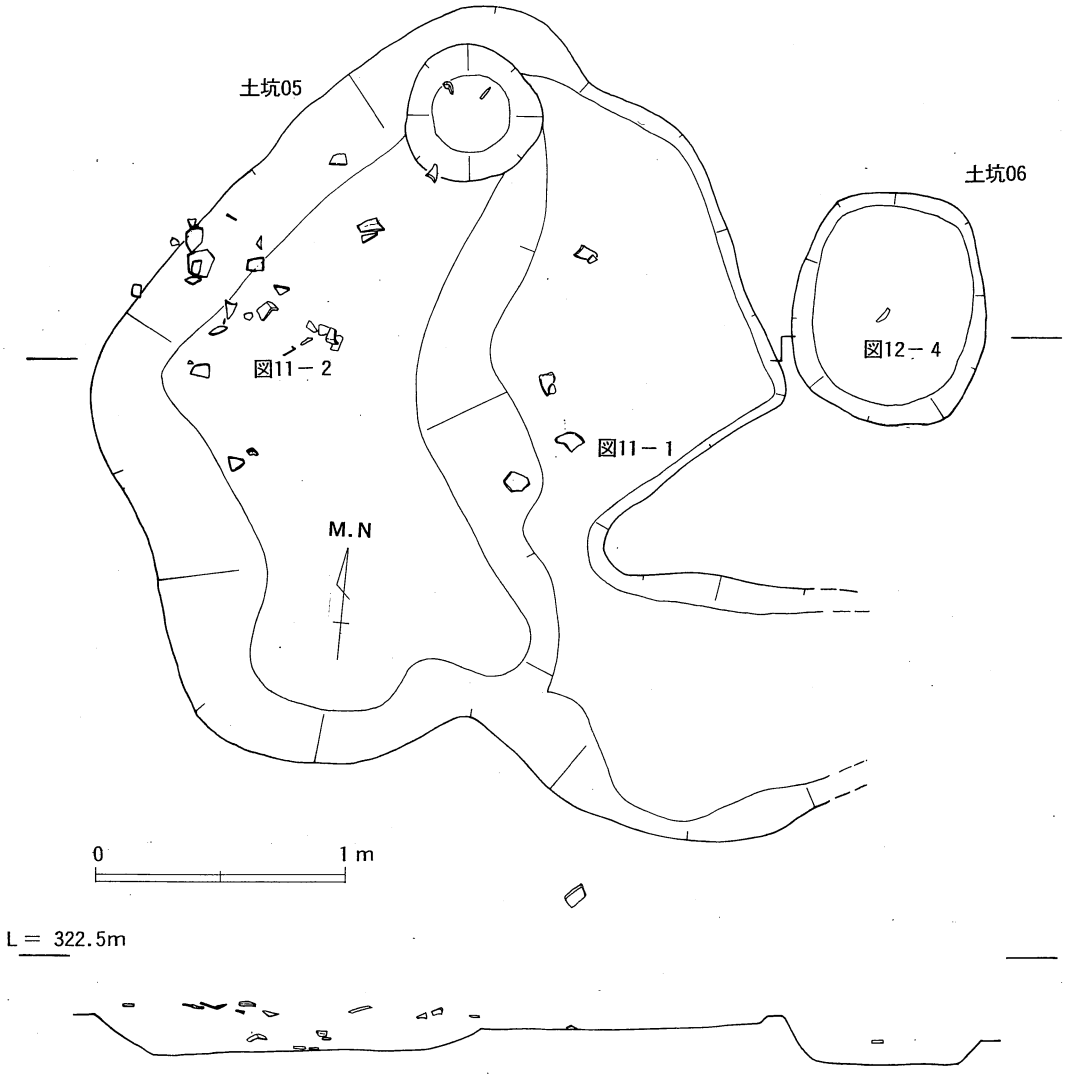


図8　下井足カワタ遺跡土坑05・06実測図

(2) 検出遺構

第１トレンチからは、ほぼ全面にわたって土坑、ピット、溝を検出している（図５）。主要遺構の概要は次のとおりである。

土坑０１（図７、図版５）

調査地北に位置する隅丸方形土坑で、一辺70～73cm、深さ87cmをはかる。暗茶灰色の埋土中からは土師器細片が出土しているが、この時期を明らかにできない。

土坑０２（図７、図版５）

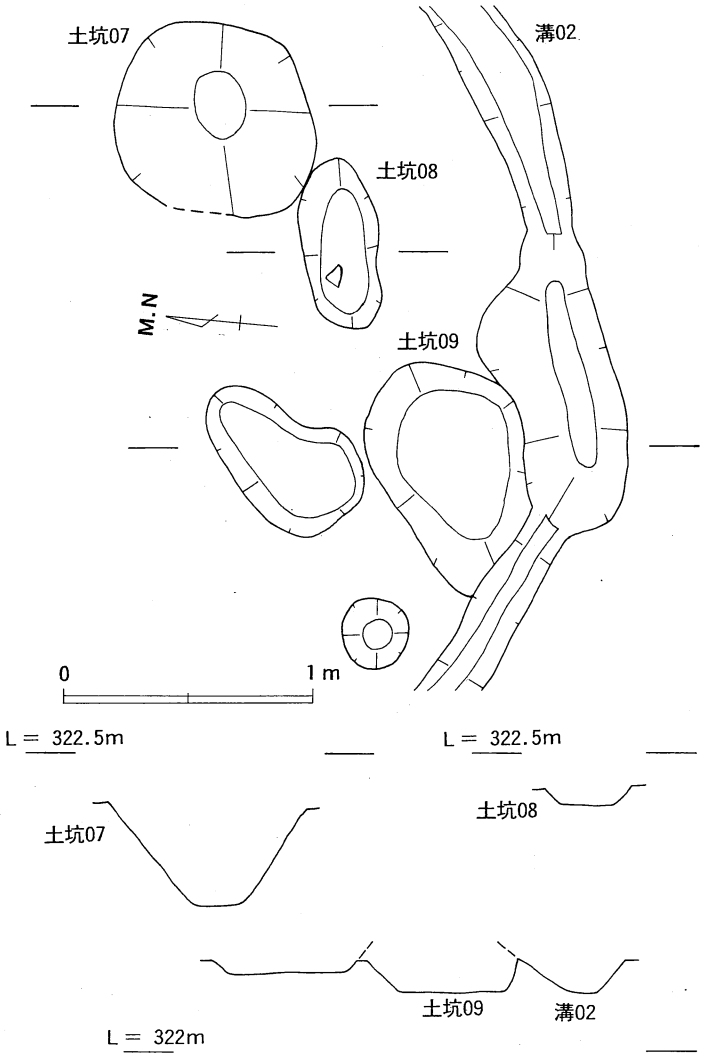


図９　下井足カワタ遺跡土坑07～09実測図

長辺 110 cm、短辺55cmの長方形土坑である。土坑南半の深さは10cm、土坑北半では深さ30cmをはかる。暗茶色の埋土中からは土師器が出土しているが、細片のため、この時期を明らかにできない。

土坑０３（図７、図版６）

一辺 100 cm～ 104 cm、深さ52cmの方形土坑である。暗茶灰色の埋土中からは須恵器片、土師器片が出土しているが、具体的な時期を明らかにできない。

土坑０４（図７、図版６）

南北 183 cm、東西 165 cmをはかる不整円形土坑である。北半の深さは23cm、南半の深さは８cmとなっている灰黄色粘質土の埋土中からは、土師器甕片が出土している。詳細は明らかでないが、後述の土坑05と同時期の可能性がある。

土坑０５（図８、図版７～８）

南北 310 cm、東西 280 cmをはかる不整円形土坑である。西半の深さは16cm、南半の深さは４cmと西半部が深くなっている。灰黄色粘質土の埋土中からは土師器甕片、須恵器杯蓋片等が出土している。出土遺物から８世紀前半と考えられる。

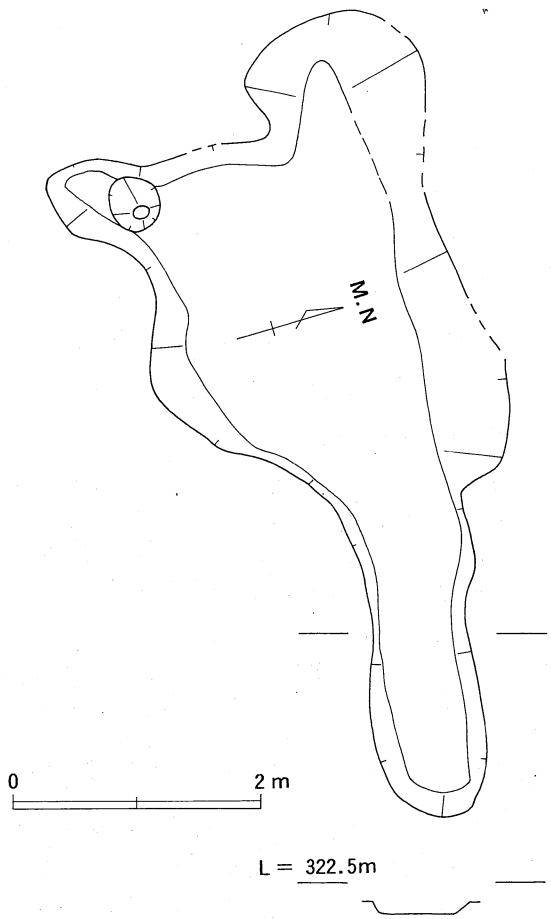


図10　下井足カワタ遺跡溝01実測図

土坑０６（図８、図版９）

調査区東端に位置する楕円形土坑で、その規模は長径97cm、南半78cm、深さ17cmである。土坑内（褐色粘質土中）からは土師器片、鉄釘が出土しており、中世のものと考えられる。墳墓の可能性は少ない。

土坑０７（図９、図版９）

溝０１を穿って形成されている径80～85cm、深さ42cmの円形土坑である。埋土は淡褐色粘質土である。遺物は検出できず、時期は明らかにできない。

土坑０８（図９、図版10）

溝０１上面に位置する長径70cm、短径34cm、深さ４cmの楕円形土坑である。暗黄茶色粘質土の埋土内からは土師器甕片が出土しているが、図化できない。中世期のものと思われる。

土坑０９（図９、図版４）

長径70cm、短径34cm、深さ４cmの楕円形土坑である。灰褐色粘質土の埋土内からは土師器細片が出土しているが、時期は明らかにできない。溝０２より古いものである。

溝０１（図10、図版４）

１次調査時にその一部を検出しており、延長650 cmとなった。東側での幅は90cm、西側での最大幅260 cm、最大深16cmをはかる。暗灰黄色粘質土の埋土中からは、サヌカイト片、須恵器片、土師器片が出土している。土坑０５と同時期と考えられる。

溝０２（図５、図版４）

半円状にめぐり、その延長は790 cm以上となる。幅12～32cm、深さ４cm前後をはかる。灰黄色粘質土の埋土中からは、サヌカイト片、土師器細片が出土している。具体的な時期を明らかにできないものの、中世期のものと考えられる。

(3) 出土遺物

須恵器（図11）

土坑０５内から出土した須恵器片３点を図化している。(1)は復元口径16.4cm、現存高1.8 cmをはかる。天井部が平らに近く、擬宝珠様つまみが付されていたと考えられる。口縁端部は下方へ短く屈曲し、先端はやや丸い。口縁部内面にかえりは認められない。焼成は悪く、軟質のため、器壁は摩滅が著しい。灰白色を呈する。(2)、(3)とも口縁部内面にかえりをもつが、その先端は口縁部以下には突出しない。(2)は復元口径15.4cm、復元かえり径12.6cm、現存高1.6 cmをはかり、色調は明オリーブ灰色、胎土は精良、焼成は堅緻となっている。(3)は復元口径15.4cm、復元かえり径13.2cm、残存高1.2 cmをはかる。色調・胎土・焼成は(2)と同様である。(1)は土坑東方、(2)は土坑東端、(3)は土坑西方下層からの出土である。(1)は８世紀前半、(2)、(3)は７世紀後半に比定できる。

鉄釘（図12、図版10）

土坑０６内から出土したものである。頭部を欠損するが、残存長約６cmをはかる角釘である。

サヌカイト片（図13、図版10）

耕作土内から６点のサヌカイト片が出土しており、うち、３点の剝片を図示した。

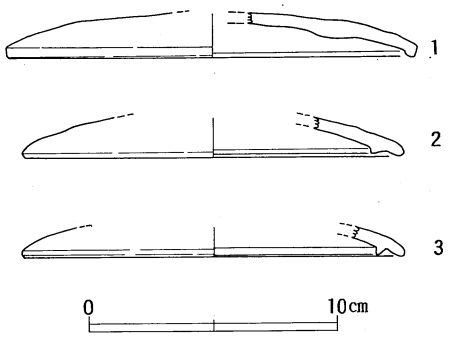


図11　下井足カワタ遺跡土坑05出土須恵器実測図

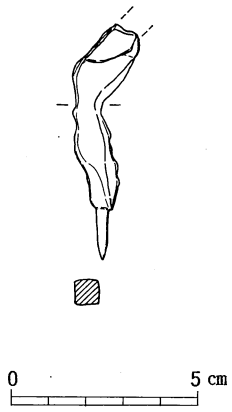


図12　下井足カワタ遺跡土坑06出土鉄釘実測図

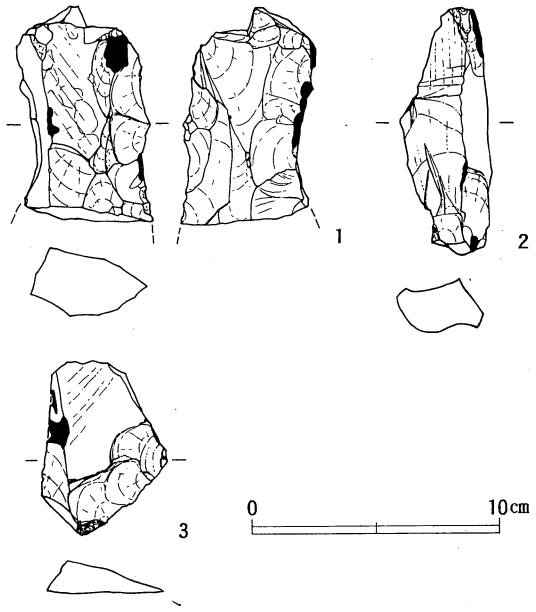


図13　下井足カワタ遺跡第１トレンチ出土サヌカイト実測図

4 ま と め

後世の耕作等により遺構の大半が削平され、遺構の検出状況は、良好とはいえない。3箇所の調査区のうち、第1トレンチから比較的多くの遺構・遺物を検出することができた。このうち土坑05内からは、7世紀後半～8世紀前半に比定できる須恵器片、土師器片などがややまとまって出土している。

耕作土中よりサヌカイト片、須恵器、土師器などが出土しており、下井足カワタ遺跡は弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世の居住域であった可能性が高い。

5 抄 録

遺 跡 名	下井足(しもいだに)カワタ遺跡
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字下井足155番地
遺 跡 立 地	標高約320～330mの尾根上
遺 跡 規 模	南北約50m、東西：70m、面積：約3500m²
時代・種別	弥生時代～中世の遺物散布地
調 査 名	下井足カワタ遺跡発掘調査事業
調 査 主 体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘、調査担当者　柳澤一宏）
調 査 原 因	道路新設工事（事業者：榛原町）
現地調査期間	1991年9月4日～1991年9月30日（2次調査）
調 査 面 積	約110.9m²（1990年発掘調査分含む）
検 出 遺 構	土坑、溝、ピット
検 出 遺 物	サヌカイト、須恵器、土師器、鉄釘　　整理箱1箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

参考文献　石野博信他『奈良県遺跡地図』第2分冊改訂　奈良県教育委員会　1984
柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』（榛原町文化財調査概要2）　榛原町教育委員会　1987
『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　奈良国立文化財研究所　1976

Ⅳ　戒場遺跡発掘調査概要

1　調査の契機と経過

(1)　調査の契機と経過

本遺跡は、榛原町遺跡番号３－１・２、奈良県遺跡番号103－９・10として登載している２箇所の遺物散布地からなり、これまでに縄文時代と中世の遺物が採集されている。

この遺物散布地を含む水田地帯約2.2haにおいて農地造成工事が実施されることとなったため、1991年５月16日付けで遺跡有無確認踏査願が提出され、計画地には中世土器が散布することが再確認された。その後、1991年８月27日付けで埋蔵文化財発掘通知書が提出され、関係機関等が調査の実施方法等について協議を行った。この結果、発掘調査は、榛原町教育委員会が担当することとなり、その調査の一部は国庫・県費補助事業としている。そして、重要な遺構等が発見されれば、その保存等について改めてその取り扱いを協議することとなった。

現地調査は1991年10月23日に着手し、同年12月６日に終了した。なお、遺跡名は２箇所の遺物散地を総称して、大字名から「戒場（かいば）遺跡」とした。

調査関係者等は次のとおりである。

調　査　主　体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会　社会教育課（課長　尾上博美）
調査担当者	榛原町教育委員会　社会教育課　技師　柳澤一宏
調査補助員	井上好美、森塚和彦、本村充保、山本美恵子
調査作業員	井上富美恵、井上豊子、奥田幸恵、戸阪アサエ、戸坂宏子、清水千鶴子
調　査　指　導	奈良県教育委員会
航空写真撮影	株式会社岡本組、株式会社パスコ
調　査　協　力	戒場自治会、榛原町役場産業課、戸阪忠夫

(2)　現地調査日誌抄

1991年（平成３年）

10月23日（水）

午後、調査前の写真撮影。

10月24日（木）

第１・２・３トレンチ設定。

10月25日（金）

午後、器材搬入。

10月28日（月）

第３トレンチ掘り下げ、精査。第４トレンチ設定、精査。

10月29日（火）

第３トレンチ精査、ピット掘り下げ。第２・３・４トレンチ平板測量。

10月31日（木）

第１～４トレンチ土層断面図作成。第１・２トレンチ写真撮影。第３トレンチ東方の一部を拡張、ピットを確認。

11月５日（火）

第５・６トレンチ設定。第３トレンチ東方拡張。

11月６日（水）

第３トレンチ拡張区精査、地区杭設定、ピット等の遺構を確認。

11月７日（木）・11月11日（月）

第３トレンチ拡張部精査、遺構掘り下げ。

11月13日（水）

航空写真撮影。第３トレンチ拡張部ＳＸ－01掘り下げ。

11月15日（水）

第３トレンチ拡張部遺構実測、ＳＸ－01掘り下げ。

11月16日（土）

午前、第５・６トレンチ土層断面図作成、平板測量。

11月18日（月）

午前、第３トレンチ拡張部遺構実測。

11月19日（火）

第３トレンチ拡張部ＳＸ－01掘り下げ。

11月20日（水）

寒波。第３トレンチ拡張部ＳＸ－01掘り下げ、瓦器椀出土。

11月25日（月）

第３トレンチ拡張部平板測量。

11月28日（木）

午前、ＳＤ－03実測。

12月２日（火）

午前、遺構写真撮影。図面補筆。

12月３日（水）

午前、器材撤収。

12月６日（金）

周辺踏査。写真撮影。

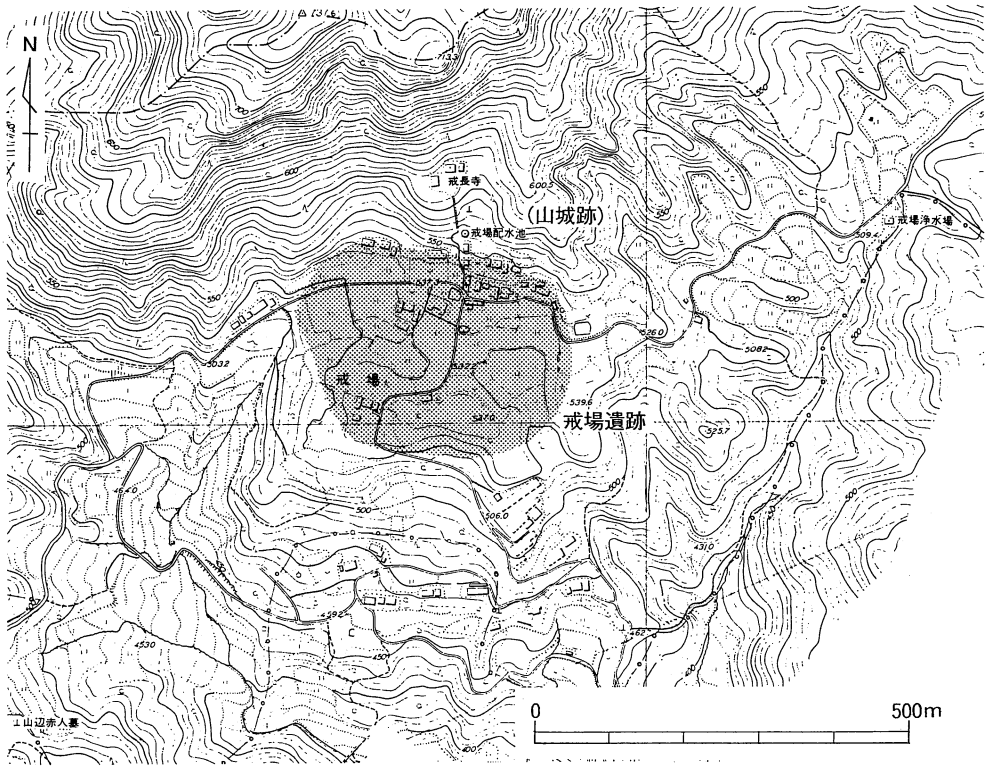


図14　戒場遺跡位置図

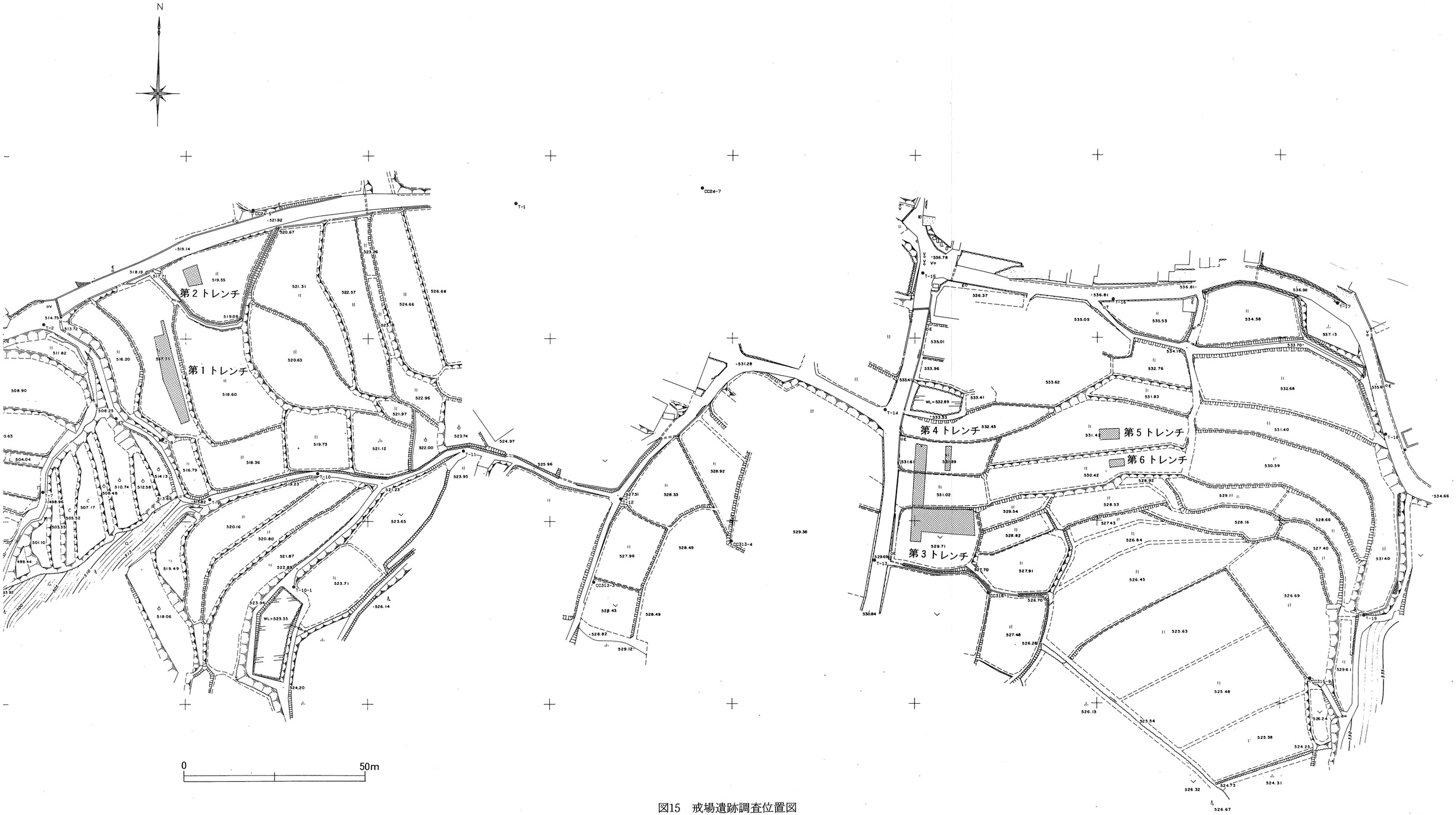


図15　戒場遺跡調査位置図

2　位置と環境

戒場遺跡は大和高原と口宇陀地方とをわける額井岳山系の中腹、戒場集落内に位置する。戒場集落は、標高約500～550ｍの南に緩やかに傾斜する平坦地に広がり、この集落規模は南北約300ｍ、東西約350ｍとなっている。この南に傾斜する平坦地の中央付近が戒場遺跡の範囲と推定しており、「ダイモン」、「カネノカイト」、「ゴマヤマ」、「ドウバタ」、「ドウサカ」などといった小字名がある。

集落の北方の山腹には、平安時代後半の創建と伝える戒長寺（かいちょうじ）がある。また、今回の調査に伴う周辺踏査によって、戒長寺の東側で中世の築造と推定される小規模な山城跡を確認している。戒場遺跡の南西約800ｍの尾根上には、山部赤人の墓と伝えるところがあり、そこには鎌倉時代前期と推定される五輪塔が建立されている（図２、14）。

3　遺跡の調査

(1)　調査区と基本土層

遺跡の範囲を確認するため、工事予定地内に６箇所のトレンチを設定した（図15～17）。

第１トレンチ（図版14）

基本土層は耕作土（１層）、灰色粘質土（２層）、榛原石の基盤層（地山・３層）となっており、地表から地山面までの深さは20cm～45cmを測る。中世土器片が若干出土したが、遺構は検出していない。このトレンチの南北両側は埋没した谷地形となっている。

第２トレンチ（図版14）

基本土層は耕作土（１層）、灰色粘質土（２層）、暗灰色粘土（３層）、黒灰色粘土（４層）、暗灰色砂礫（５層）となっている。地表から掘削面までの深さは約95cmである。サヌカイト片、中世土器片が出土している。遺構は認められず、埋没谷となっている。

第３トレンチ（図版15～19）

３面の水田を南北に横断する格好でトレンチを設定したところ最南の水田で遺構・遺物を検出したため、東方に調査範囲を拡張している。なお、第３トレンチ拡張部の地区割は図21のとおりである。

基本土層は、地区によって若干の相違が見うけられるものの、耕作土（１層）、暗青灰色粘質土（２層）、茶灰色粘質土（３層）、暗茶灰色粘質土（４層）、地山（５層）となっている。３時期の遺構を確認でき、３層上面、４層上面、地山面がそれぞれの遺構面となっている。

第４トレンチ（図版15）

基本土層は耕作土（１層）、地山（２層）となっており、明確な遺構は認められない。

第５トレンチ（図版20）

基本土層は耕作土（１層）、灰色粘質土（２層）、淡褐灰色粘質土（３層）、褐灰色粘質土（４層）、黒灰色粘質土・黄灰色土（５層）、地山（６層）となっている。地表から地山面までの深さは西側で55㎝、東側で75㎝をはかり、西から東へと緩やかに傾斜する。明確な遺構は認められない。

第６トレンチ（図版20）

基本土層は耕作土（１層）、灰色粘質土（２層）、灰茶色粘質土・暗灰色粘土（３層）、褐灰色粘質土・黒灰色粘質土（４層）、地山（６層）となっている。地表から地山面までは約70～80㎝をはかる。明確な遺構は認められない。

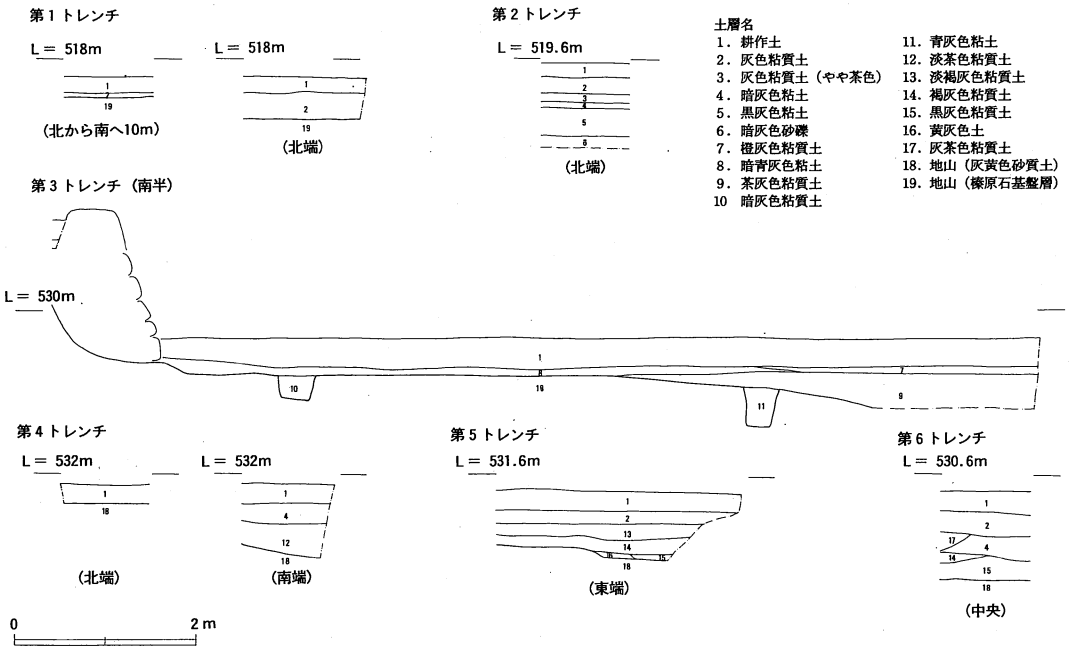


図16　戒場遺跡土層断面図

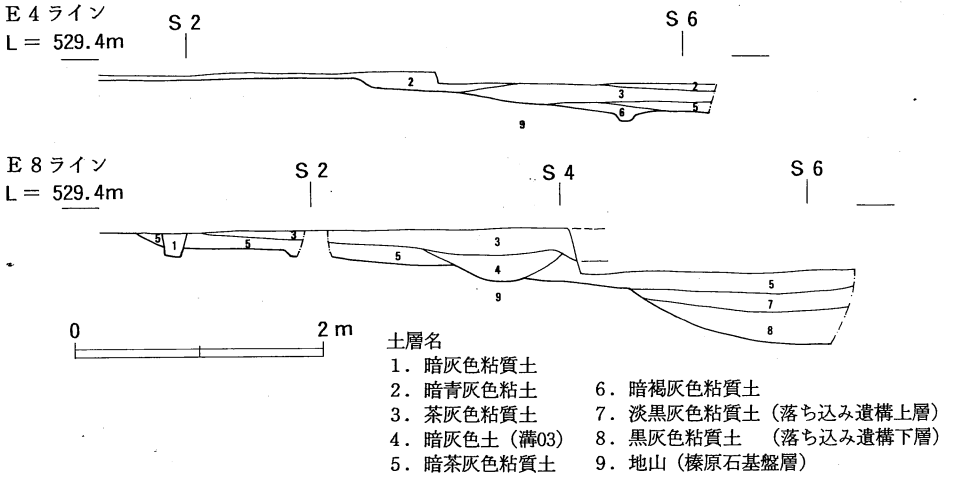


図17　戒場遺跡第３トレンチ拡張部土層断面図

(2)　検出遺構

先述のとおり、第３トレンチ東方の拡張部分で３時期の遺構を検出している。以下、主要遺構の概要を述べる。

下層遺構

落ち込み遺構（図18、図版16・19）

調査区の東南隅で検出しているが、その明確な全容は明らかでない。不整半円形を呈するのであろうか。南傾する地山面を穿って形成されており、埋土は淡黒灰色粘質土（上層）、黒灰色粘質土（下層）からなる。埋土中からは、瓦器、土師器が出土している。

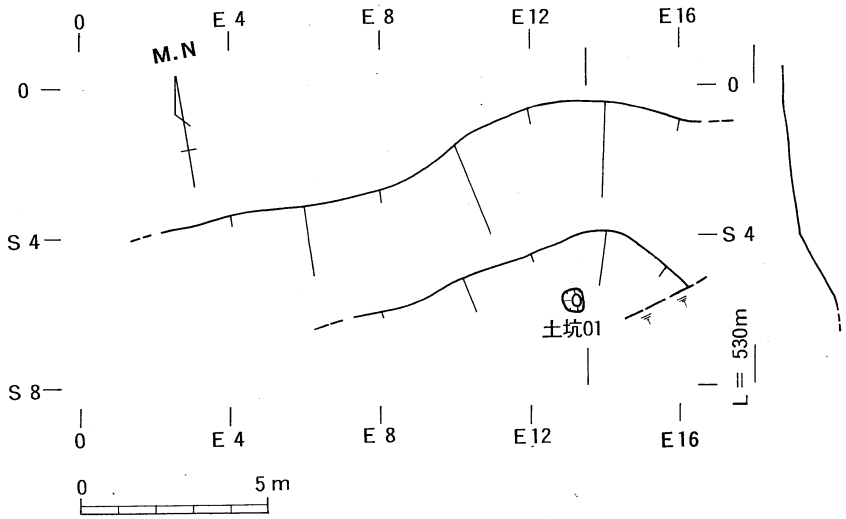


図18　戒場遺跡落ち込み遺構実測図

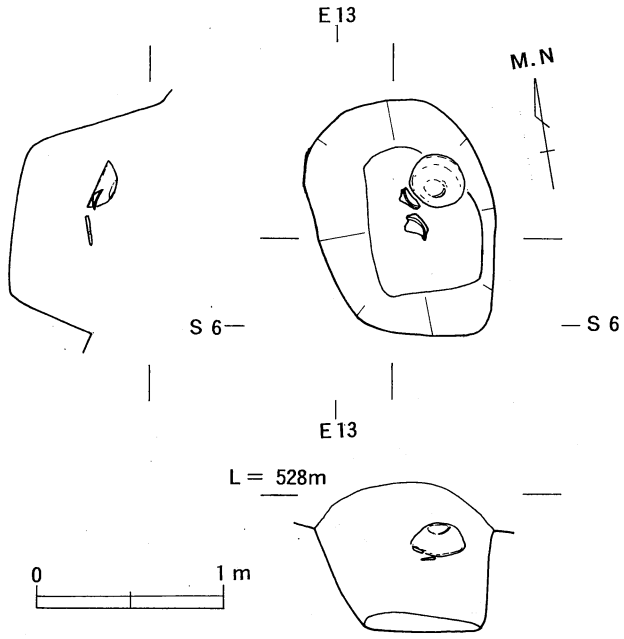


図19　戒場遺跡土坑01実測図

土坑０１（図19、図版19）

落ち込み遺構底の地山を穿って形成された楕円形土坑である。土坑上半部からは瓦器椀が逆位で出土している（出土遺物の項参照）。土坑規模は南北径67㎝、東西径47㎝、最大深40㎝をはかる。

中層遺構

溝０３（図20、図版18）

落ち込み遺構01を埋める暗茶灰色粘質土を穿って東西方向に形成されている。調査中の不注意によって東西両端の状況を明らかにできない。延長440㎝以上、幅58～85㎝、最大深38㎝をはかる。溝埋土の暗灰色土中からは瓦器、土師器の細片が出土している。

上層遺構

中層遺構を埋める茶灰色粘質土上面ないし地山面に土坑、ピット、建物遺構等が認められる。

掘立柱建物遺構（図22、図版15～18）

東西２間、南北１間（東西約440㎝、南北約280㎝）をはかり、柱穴は直径40～80㎝、深さ54～80㎝をはかる。埋土は暗灰色粘質土、茶灰色粘質土である。なお、この建物はさらに北へのびる可

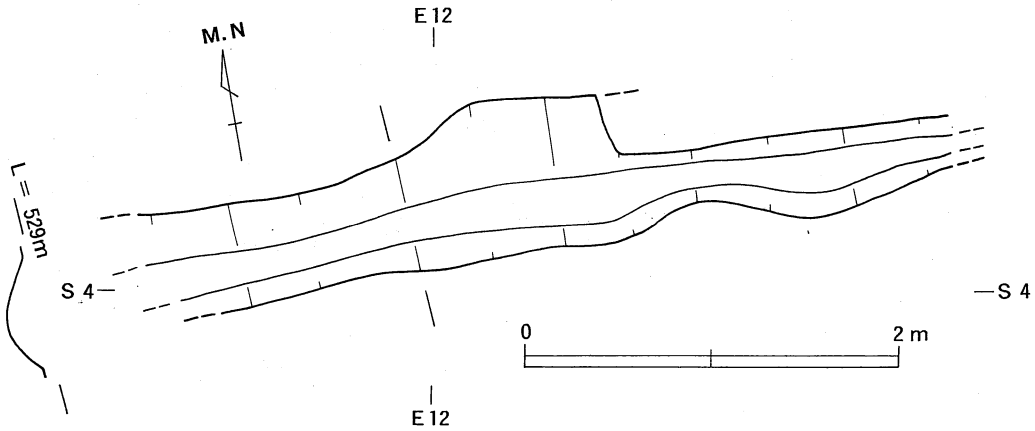


図20　戒場遺跡溝03実測図

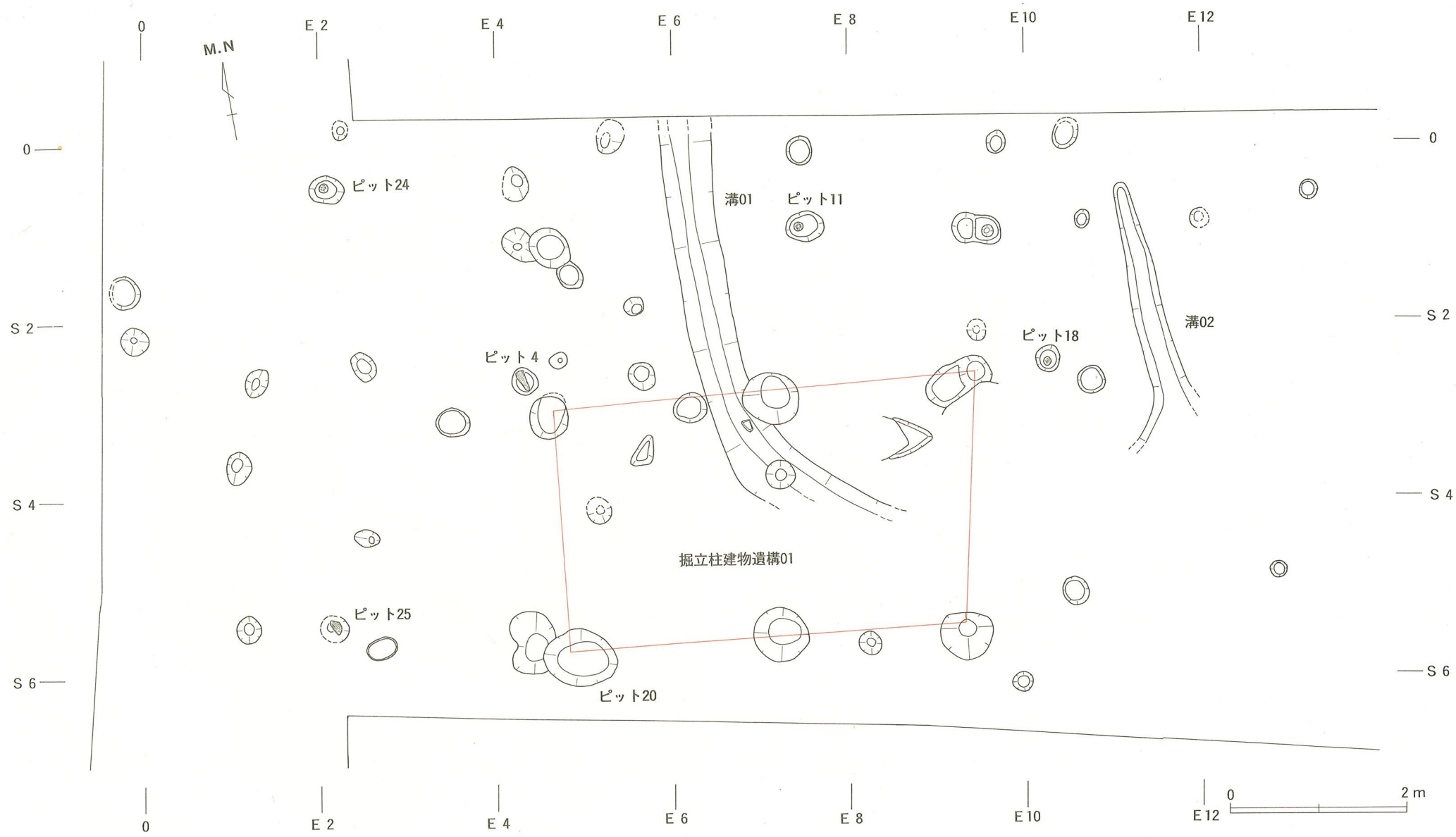


図21　第３トレンチ拡張部上層遺構平面図

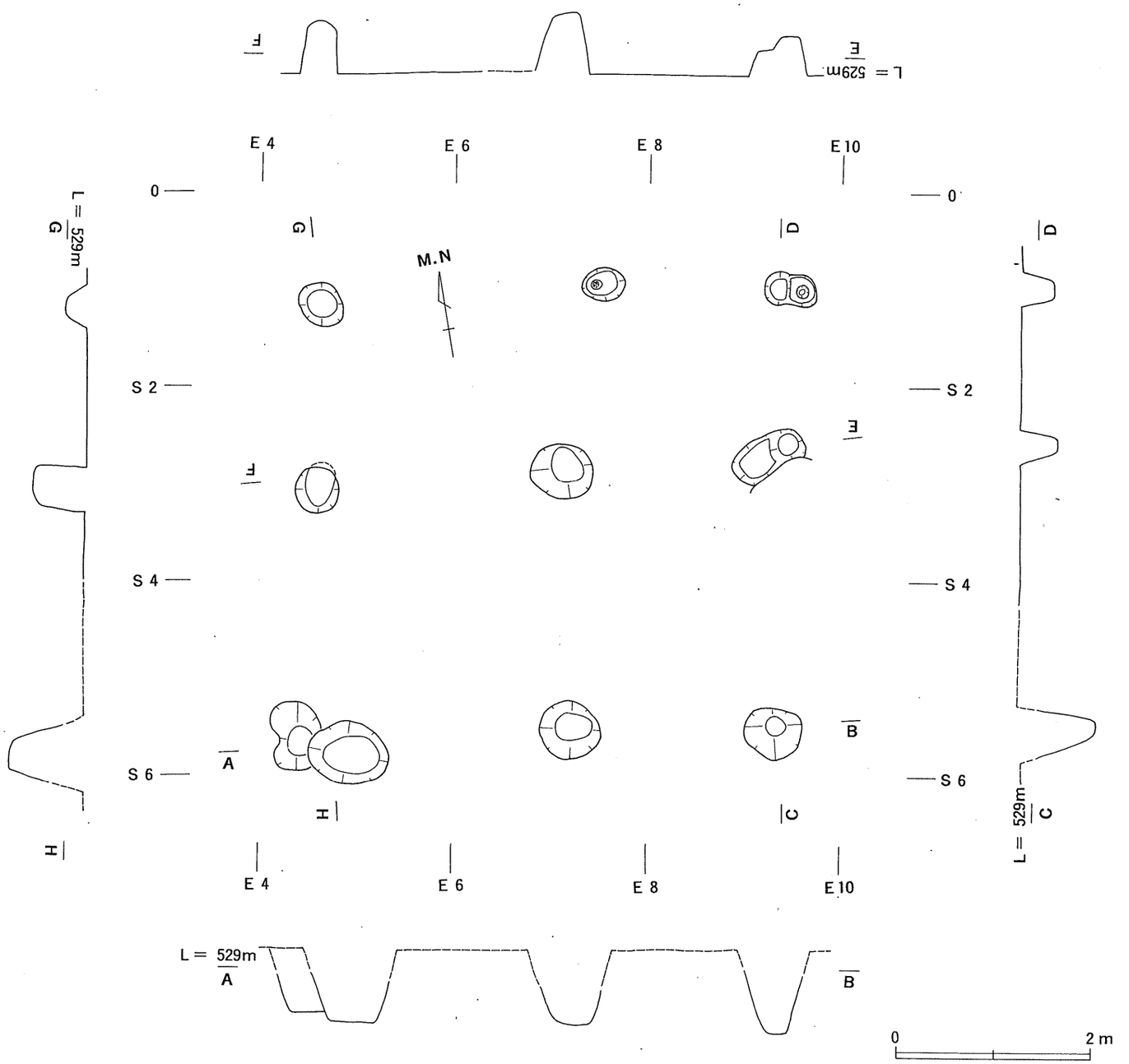


図22　戒場遺跡掘立柱建物遺構01実測図

能性もあり、この場合、東西２間、南北２間（東西約 440 ㎝、南北約 440 ㎝）となる。

溝０１（図23、写真２、図版18）

SB－01を南北に横断するかのように形成されており、南端は東方に屈曲する。規模は延長480 ㎝以上、幅56～72㎝、深さ約18㎝をはかる。埋土は２層に大別でき、上層が暗灰色粘質土、下層が暗青灰色砂となっている。この埋土中からは須恵器、瓦器、磁器が出土している。

溝０２（図21）

規模は延長 300 ㎝以上、幅18～42㎝、最大深10㎝をはかる。炭細片を含む茶灰色粘質土の埋土中からは瓦器、土師器、瓦質土器の各破片が出土している。

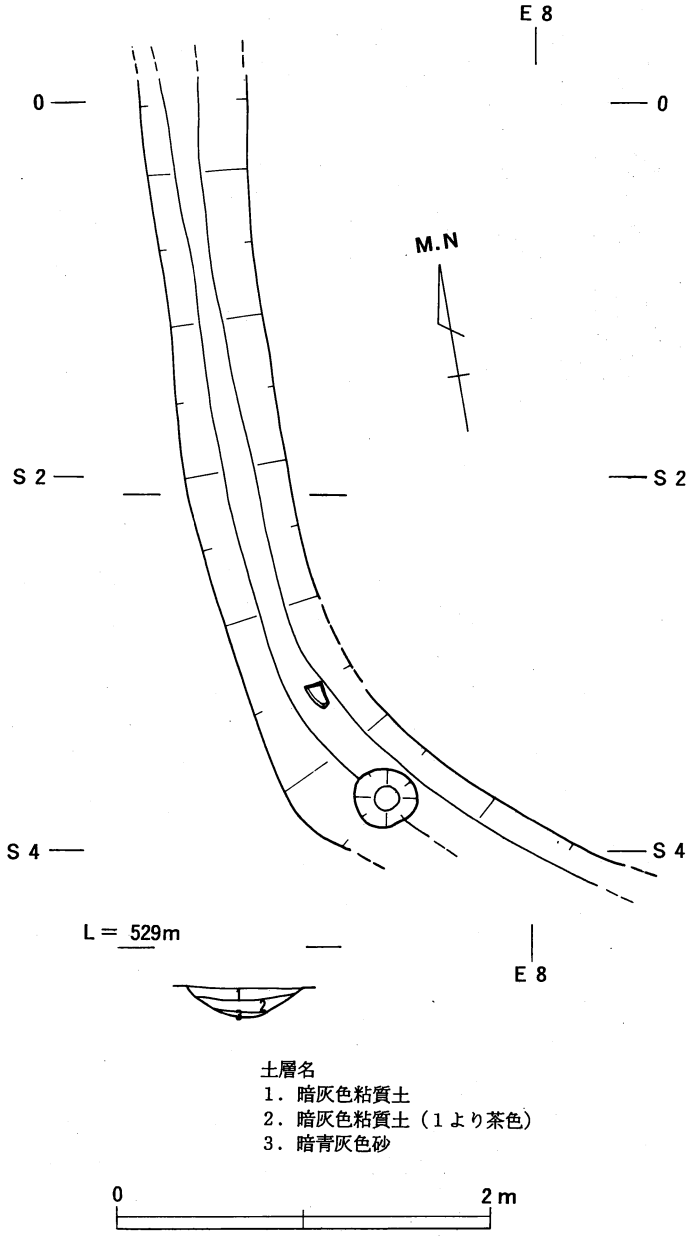


図23　戒場遺跡溝01実測図

写真２　溝01土層断面

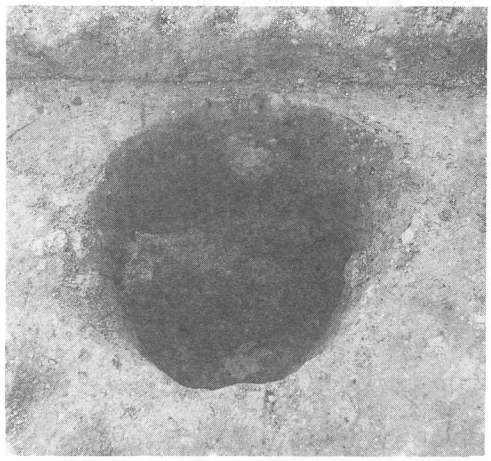


写真３　ピット４

写真４　ピット11

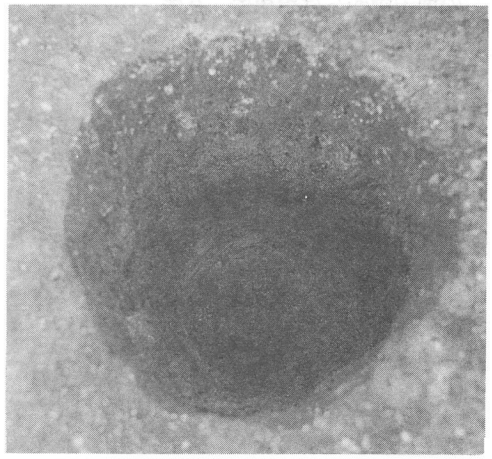


写真５　ピット18

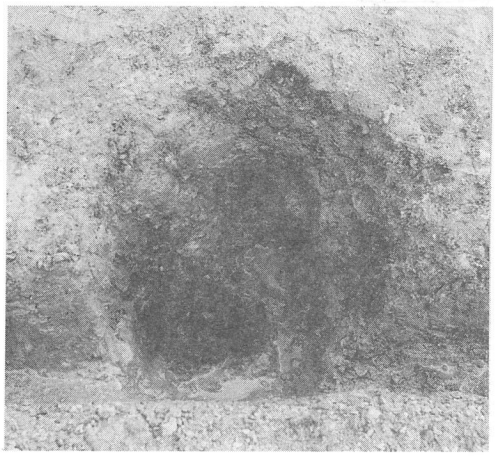


写真６　ピット24

写真７　ピット25

(3) 出土遺物(図24～26、表４)

今回の発掘調査によって、須恵器（甕）、瓦器（椀・皿）、土師器（皿・土釜）、青磁（椀）、サヌカイトを検出することができ、その量は整理箱３箱を数える。なかでも第３トレンチの拡張部分からの出土量は比較的多い。ここには、第３トレンチから出土した29点の土器を図示している。

包含層出土土器（図24－１～３）

(1)は茶灰色粘質土から出土の瓦器椀、(2)は土師器皿で、この包含層上面に上層遺構が構築される。底部の破片ではあるが、内面に６輪の連結輪状暗文が認められ、高台はやや厚みのある逆三角形を呈する。(3)は暗茶灰色粘質土から出土した瓦器椀底部片である。外傾状の細長い高台からなり、底部内面には連結輪状暗文が認められる。(1)、(3)は川越編[註1]年の第Ⅱ段階Ｂ型式、松本編[註2]年の土坑－01下層期（新）～南SE－21下層期に比定でき、12世紀前葉～中葉の年代が考えられる。

上層遺構出土土器（図24－４～６）

(4)はピット20内（掘立柱建物遺構01）から出土した青磁椀の底部片で、復元高台径5.4 cmをはかる。(5)はピット４上面から出土した瓦質土器の擂鉢片である。復元底部径10.6cmをはかり、内面には５～６条の短い擂目が放射状に施されている。(6)は溝02から出土した瓦質土器鉢である。復元底部径15.8cm、器高4.3 cmをはかり、外面には８弁の花紋スタンプを等間隔にめぐらす。

落ち込み遺構出土土器（図25）

(1)～(4)が上層、(5)～(22)が下層からの出土である。

(1)～(8)は瓦器椀底部、(9)～(19)は瓦器椀体部の破片である。底部内面には連結輪状暗文、体部内面には横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施し、口縁端部内面に沈線をめぐらす。(16)、(17)は口縁部の内面に明瞭な沈線がめぐる。これらは川越編[註1]年の第Ⅱ段階Ｂ型式、松本編[註2]年の土坑－01下層期（新）～南SE－21下層期に比定でき、12世紀前葉～中葉の年代が考えられる。

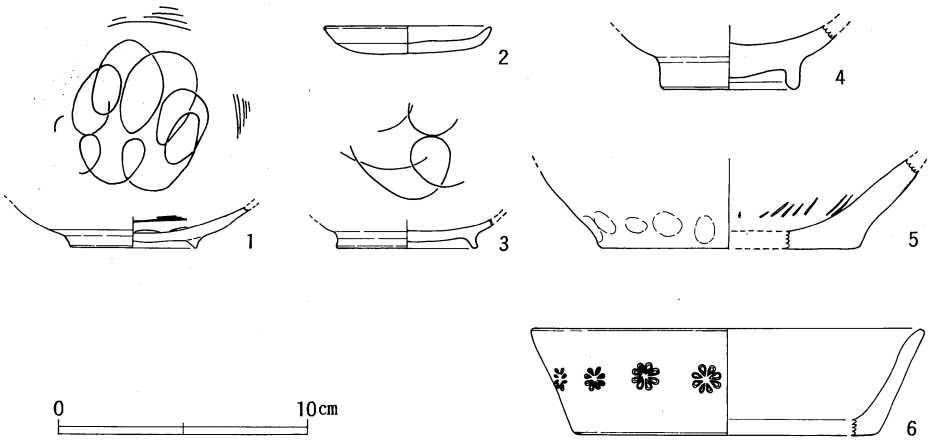


図24　戒場遺跡第３トレンチ包含層等出土土器実測図

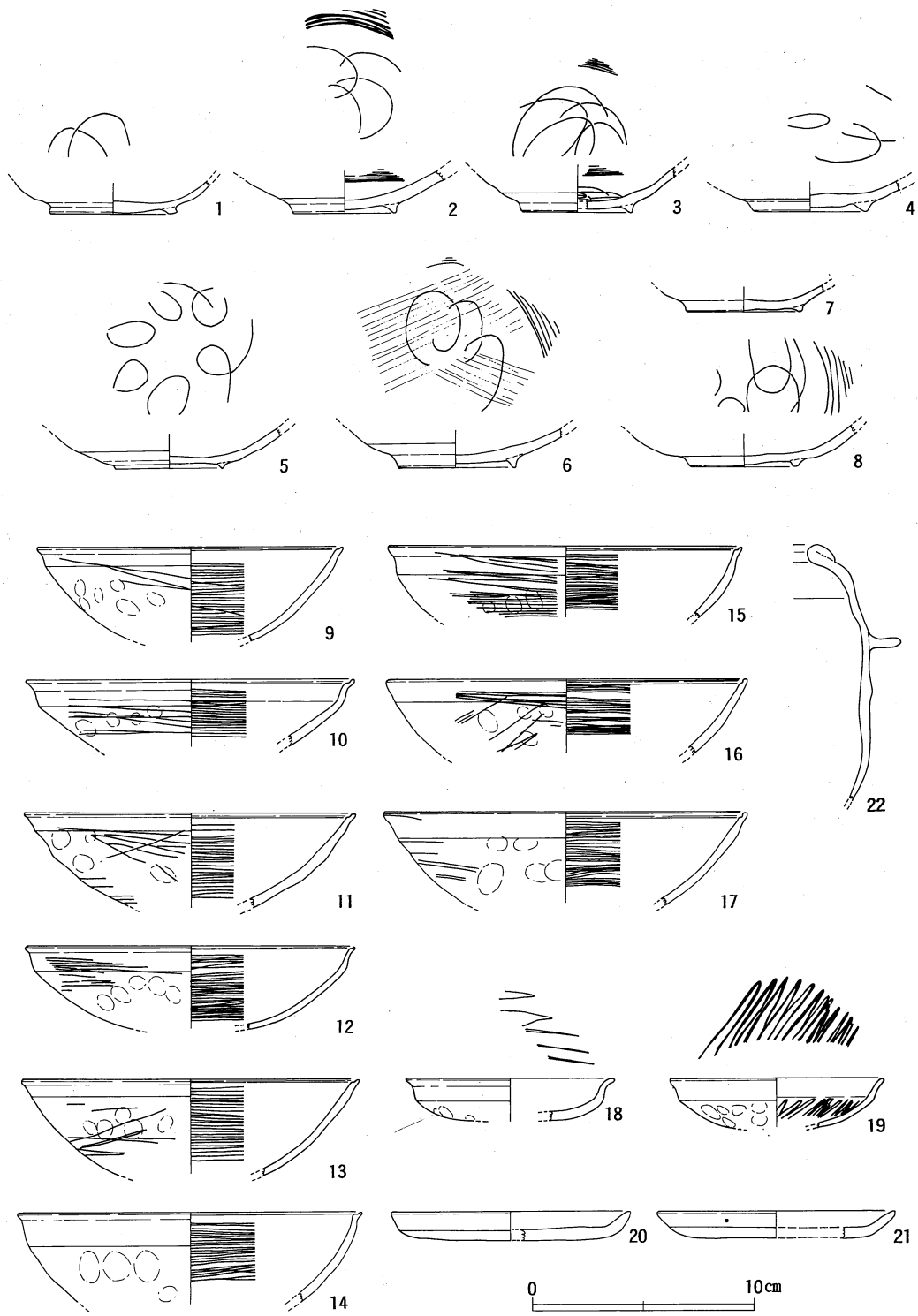


図25　戒場遺跡落ち込み遺構出土土器実測図

⑳、㉑は土師器皿片で、復元口径10.4～10.6cmをはかる。㉒は土師器土釜である。破片のため、口径等は復元できない。

土坑01出土土器（図26）

土坑01上層からほぼ完形で出土した瓦器椀である。底部内面には、平行線状（ジグザグ状）暗文、体部内面には丁寧な横方向のヘラミガキ調整を施す。体部外面にはやや粗い横方向・斜め方向の断続的なヘラミガキ調整が認められる。口縁部内面には明瞭な沈線をめぐらす。高台は肥厚した逆三角形となっている。口径15.2cm、器高6.2cmをはかる。川越編[註1]年の第Ⅰ段階D型式、松本編[註2]年の井戸一03青粘期に比定でき、12世紀初頭の年代が考えられる。

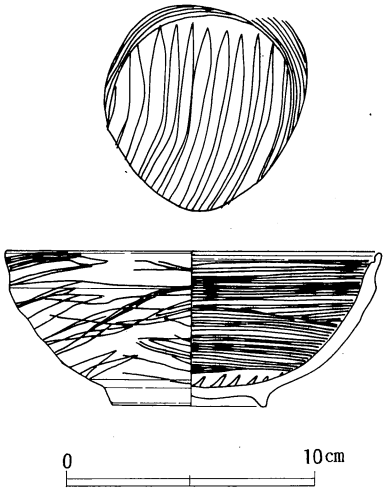


図26　戒場遺跡土坑01出土土器実測図

註１）　川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会編　1983

註２）　松本洋明他『十六面・薬王寺遺跡』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第54冊）　奈良県立橿原考古学研究所　1988

4　ま　と　め

戒長寺は先述のとおり、平安時代後期の創建と伝えられ、広い寺域をもっていたと考えられている。戒長寺南方の戒場集落内には「ダイモン」、「カネノカイト」、「ゴマヤマ」、「ドウバタ」、「ドウサカ」などの寺院に関係すると思われる小字名があり、戒長寺旧境内が戒場遺跡と合致すると考えてきた。

戒長寺から真っすぐ南方へのびる町道の延長上には、「ダイモン」があり、町道は、かつての参道であった可能性がある。町道東側の第３トレンチからは12世紀代の建物跡等の遺構を確認し、上層遺構は12世紀後葉すぎ、中層遺構は12世紀中葉すぎ、下層遺構は12世紀初頭の年代と考えられる。これらは創建頃の戒長寺に関連する遺構である可能性が高く、建物遺構は参道脇の小坊であろうか。

戒場遺跡の中心は町道付近から西方の住宅地のあたりと推定できるが、ほとんどが事業範囲外となっているため、今回は発掘調査を実施していない。このため、今後の発掘調査等によって遺跡の範囲、遺構の性格等をさらに明らかにしていかなければならない。

表4　戒場遺跡出土土器観察表

挿図番号	機種・器形	法　量(cm)	形　態　の　特　徴
24－1	瓦器・椀	高台径 5.0 残存高 1.5	やや厚みのある逆三角形の張り付け高台である。
24－2	土師器・皿	口径 6.8 器高 1.1	口縁部はやや内湾状に丸みをおびて立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部は丸みをもち、窪みを認められない。
24－3	瓦器・椀	復元高台径 5.6 残存高 1.2	外傾状に張り付けた細長い高台である。
24－4	青磁・椀	復元高台径 5.4 残存高 2.5	細長く下方にのびる高台である。
24－5	瓦質土器・擂鉢	復元底径 10.6 残存高 3.6	平底を呈する。底部内面端には短い5～6条の擂目を施し、10単位に復元できる。
24－6	瓦質土器・鉢	復元口径 15.8 復元底径 11.8 器高 4.3	体部は直線的に外上方にのびる。底部の大半は残存しないが、平底と思われる。 体部外面の中ほどには8弁の花紋スタンプを等間隔に巡らす。
25－1	瓦器・椀	復元高台径 5.6 残存高 1.5	やや外方にひらく逆三角形状の張り付け高台である。
25－2	瓦器・椀	高台径 4.6 残存高 1.9	逆三角形状の張り付け高台である。
25－3	瓦器・椀	復元高台径 5.0 残存高 2.1	やや外方にひらく逆三角形状の張り付け高台である。
25－4	瓦器・椀	復元高台径 5.0 残存高 1.4	やや肥厚する逆三角形状の張り付け高台である。
25－5	瓦器・椀	高台径 4.8 残存高 1.8	小さな逆三角形の張り付け高台である。
25－6	瓦器・椀	高台径 5.4 残存高 1.8	細長い逆三角形の張り付け高台は、やや外傾する。
25－7	瓦器・椀	高台径 5.2 残存高 1.2	低い逆三角形の張り付け高台である。
25－8	瓦器・椀	復元高台径 5.4 残存高 1.9	やや外方にのびる肥厚した逆三角形の張り付高台である。
25－9	瓦器・椀	復元口径 13.8 残存高 4.3	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部内面に沈線を施す。

技　法　の　特　徴	色調・胎土・焼成	出　土　地　点
底部内面には6輪の連結輪状暗文、体部内面には横方向の暗文（ヘラミガキ調整）が認められる。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	茶灰色粘質土
口縁部内外面は横ナデ、その他は内外面ともナデを施す。	色調　にぶい橙色・褐灰色 胎土　精良 焼成　良好	茶灰色粘質土
内面はナデののち、底部は連結輪状暗文、体部は横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	暗茶灰色粘質土
	色調　明緑灰色 胎土　精良 焼成　堅緻	ピット20 （掘立柱建物遺構01）
内外面とも摩滅しているが、内面はナデ、外面は指圧痕が認められる。	色調　内面：灰色 外面：灰白色 胎土　精良 焼成　良好	ピット4上面
内外面とも横ナデを施す。	色調　内面：灰白色 外面：黒褐色 胎土　精良 焼成　軟質	溝０２
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　上層
底部内面は、横ナデののち連結輪状を施す。体部内面には横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　上層
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　上層
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。	色調　内：黒色、 外：灰白色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　上層
底部内面は、横ナデののち6輪の連結輪状暗文を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。体部内面には横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
内外面とも摩滅が著しい。	色調　灰白色 胎土　精良 焼成　軟質	落ち込み遺構　下層
底部内面は、横ナデののち連結輪状暗文を施す。体部内面には横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部内面には、横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を密に施す。体部外面には、粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層

挿図番号	機種・器形	法　量（cm）	形　態　の　特　徴
25－10	瓦器・椀	復元口径 14.8 残存高 3.3	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25－11	瓦器・椀	復元口径 14.8 残存高 4.2	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部内面に沈線を施す。
25－12	瓦器・椀	復元口径 14.8 残存高 3.7	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25－13	瓦器・椀	復元口径 15.2 残存高 4.3	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25－14	瓦器・椀	復元口径 15.6 残存高 4.0	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25－15	瓦器・椀	復元口径 16.0 残存高 3.2	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。口縁端部内面には、沈線を施す。
25－16	瓦器・椀	復元口径 16.2 残存高 3.3	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面に沈線を施す。
25－17	瓦器・椀	復元口径 16.4 残存高 4.1	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面に沈線を施す。
25－18	瓦器・皿	復元口径 9.4 残存高 1.9	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。
25－19	瓦器・皿	復元口径 9.8 残存高 2.2	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸くおさめる。
25－20	土師器・皿	復元口径 10.4 器高 1.3	口縁部は直線気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。
25－21	土師器・皿	復元口径 10.6 器高 1.2	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸い。
25－22	土師器・土釜	復元口径 － 残存高 11.5	口縁部は内傾し、上方に立ち上がる。口縁端部は折り返され、丸く肥厚する。鍔は水平に外方へのびる。
26	瓦器・椀	口径 15.2 高台径 6.0 器高 6.2	口縁部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸い。この内面には、明瞭な沈線を施す。高台は肥厚した逆三角形の張り付け高台である。

技　法　の　特　徴	色調・胎土・焼成	出　土　地　点
体部内面には、やや粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面には粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部内面には、横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を密に施す。体部外面には、粗い横方向・斜め方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部内面には、やや粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面には粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部内面には、横方向の暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面には粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部内面には、横方向の暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面には粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部内面には、横方向の暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面にはやや粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部内面には、横方向のやや粗い暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面にはやや粗い横方向・斜め方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部内面には、横方向のやや粗い暗文（ヘラミガキ調整）、体部外面にはやや粗い横方向の暗文（ヘラミガキ調整）を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
底部内面に粗い平行線状暗文を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
底部内面に太い平行線状暗文を施す。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部は横ナデ、内面中央はナデを施す。	色調　にぶい橙色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
体部は横ナデ、内面中央はナデを施す。	色調　橙色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
口縁部外面は横ナデ、体部内面には横ナデ・刷毛目が認められる。	色調　淡黄色 胎土　精良 焼成　良好	落ち込み遺構　下層
底部内面には平行線状暗文、体部内面には全面に丁寧な横方向の暗文(ヘラミガキ調整)を施す。体部外面にはやや粗い横方向・斜め方向の断続的な暗文(ヘラミガキ調整)が認められる。	色調　暗灰色 胎土　精良 焼成　良好 備考　ほぼ完形	土坑０１

5 抄　　録

遺　跡　名	戒場(かいば)遺跡
調　査　地	奈良県宇陀郡榛原町大字戒場268-1、269-1、371、372-1、372-2、435-1、435-2番地
遺跡立地	標高約520～550ｍの山塊南斜面
遺跡規模	南北約250ｍ、東西約300ｍ、面積：約75000㎡
時代・種別	縄文時代・平安時代～中世の遺物散布地 平安時代の建物跡等（寺院跡？）
調　査　名	戒場遺跡遺跡発掘調査事業
調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘、調査担当者　柳澤一宏）
調査原因	農地造成工事（事業者：榛原町役場産業課）
現地調査期間	1991年10月23日～1991年12月６日
調査面積	約360㎡
検出遺構	掘立柱建物遺構、土坑、ピット、溝、落ち込み遺構
検出遺物	須恵器（甕）、瓦器（椀、皿）、土師器（皿、土釜）、青磁（椀）、磁器（甕）、サヌカイト　　整理箱３箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

参考文献　石野博信『奈良県遺跡地図』第２分冊改訂　奈良県教育委員会　1984

柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』（榛原町文化財調査概要２）　榛原町教育委員会　1987

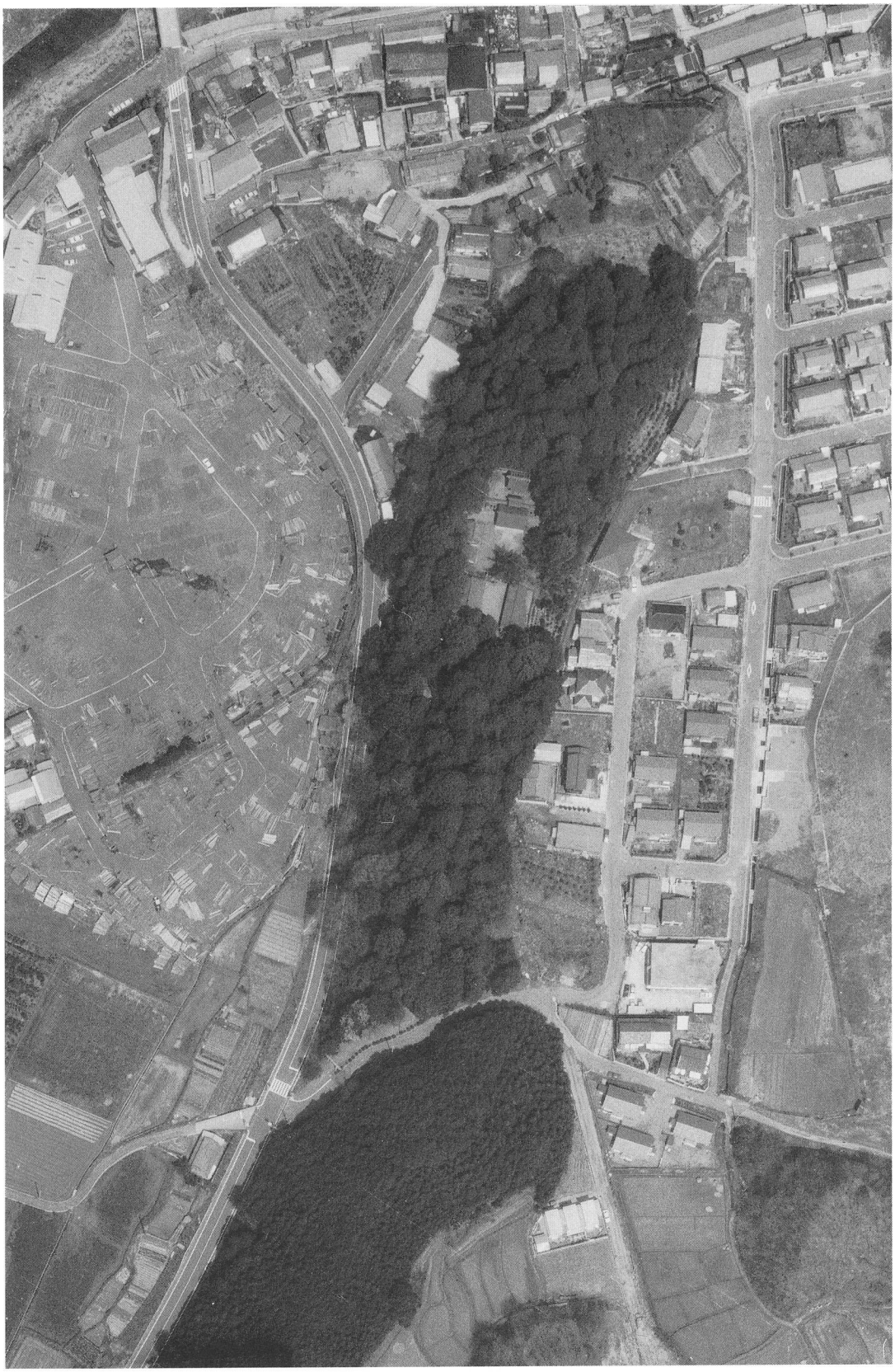
榛原町史編集委員会『榛原町史』　榛原町役場　1959

図　　版

図版一　下井足カワタ遺跡

航空写真（1981年撮影）

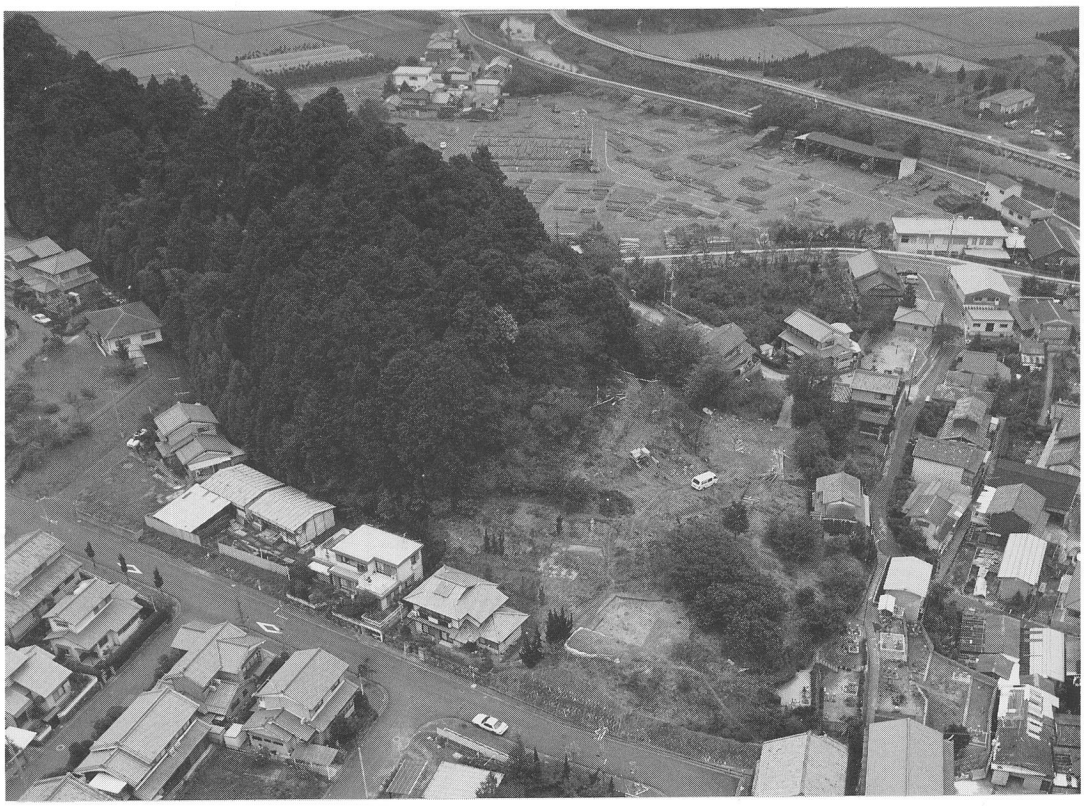
図版二　下井足カワタ遺跡



航空写真（1981年撮影）

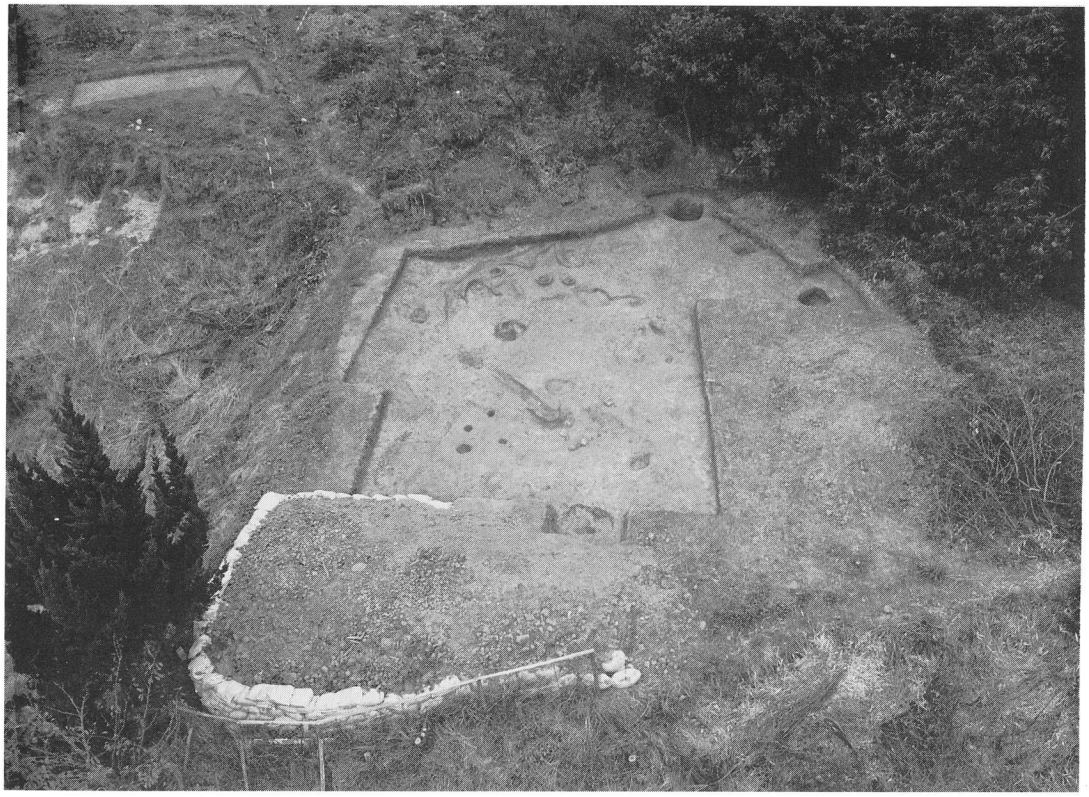
図版三　下井足カワタ遺跡

航空写真（北から）



航空写真（東から）

図版四　下井足カワタ遺跡



航空写真（東から）

航空写真（垂直）

土坑０１（南東から）

土坑０２（南東から）

図版六　下井足カワタ遺跡

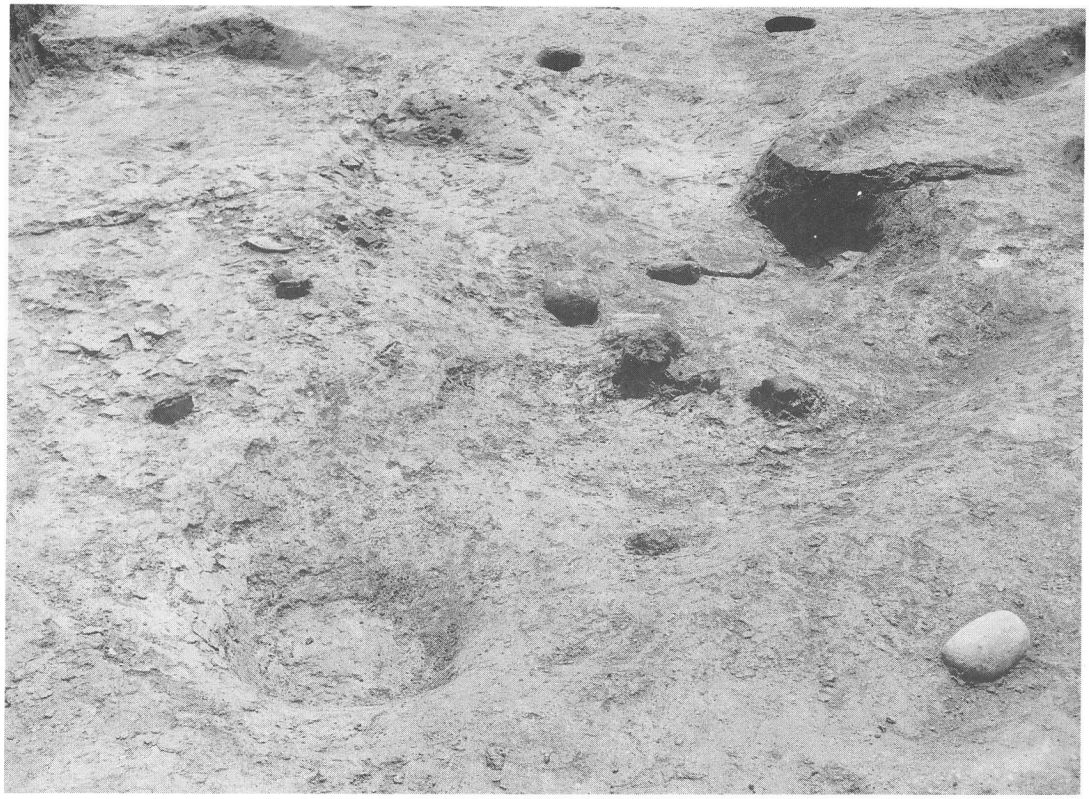
土坑０３（東から）

土坑０４（東から）

土坑０５上層（北から）

土坑０５上層（東から）

図版八　下井足カワタ遺跡



土坑０５下層（北から）

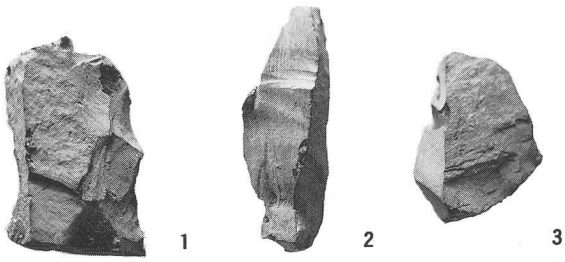
土坑０５下層（東から）

土坑０６（西から）

土坑０７（東から）

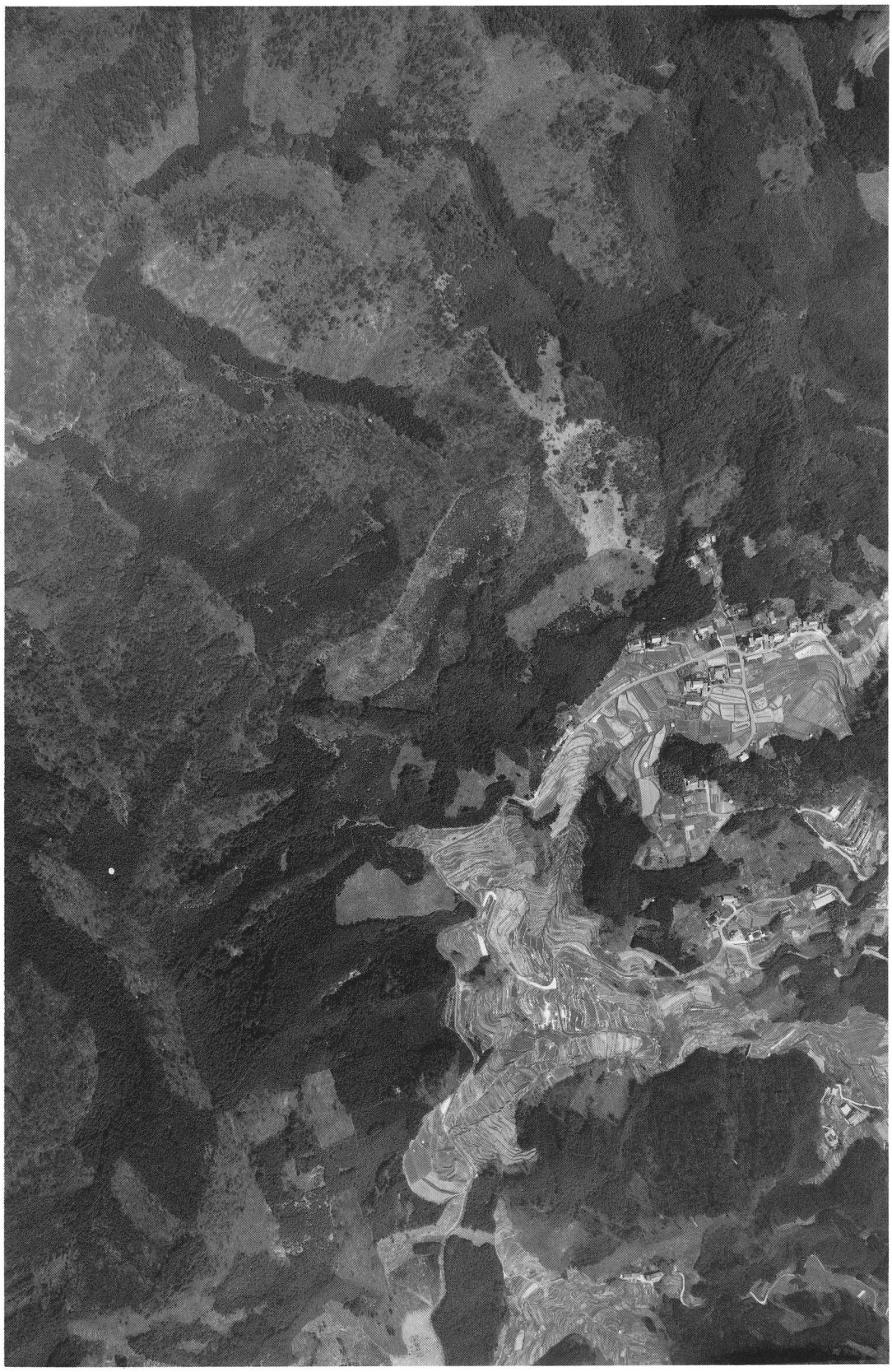
土坑０８（南から）

土坑０６出土鉄釘



耕作土出土サヌカイト片

図版一一　戒場遺跡



航空写真（1981年撮影）

図版一二　戒場遺跡

航空写真（1981年撮影）

図版一三　戒場遺跡

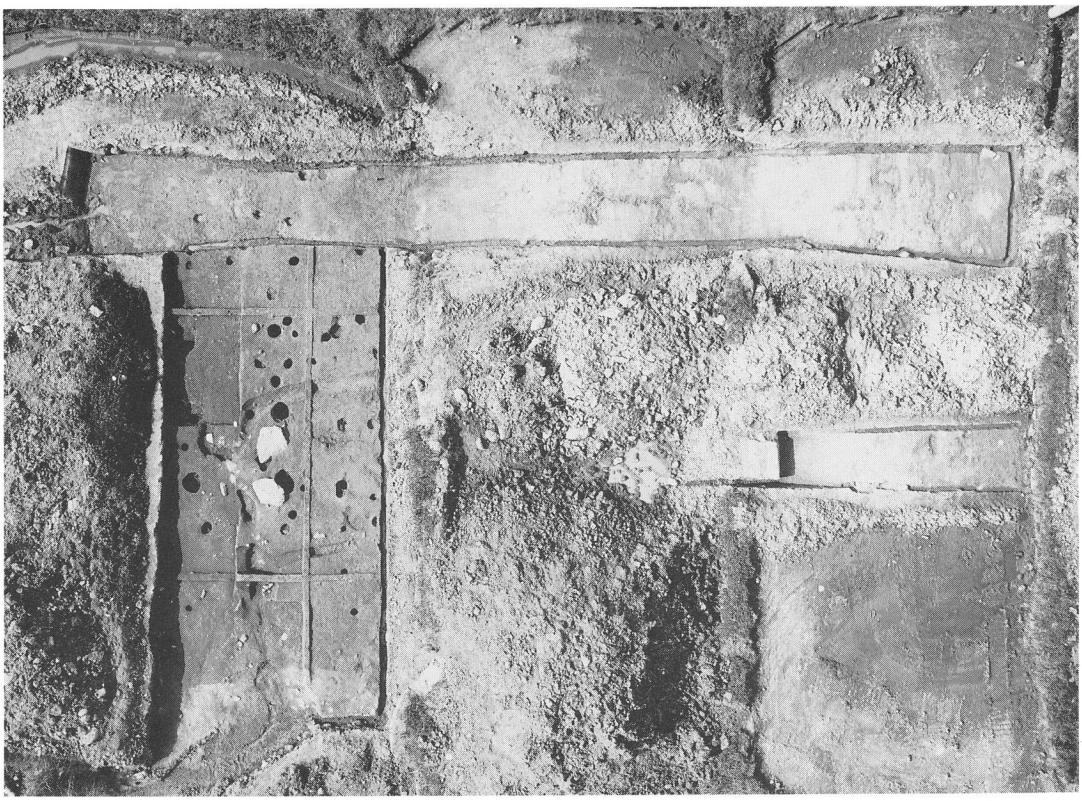
航空写真（南東から）

航空写真（垂直）

図版一四　戒場遺跡

第１トレンチ（北から）

第２トレンチ（南から）



第３・４トレンチ（垂直）

第３トレンチ（東から）

図版一六　戒場遺跡

第３トレンチ拡張部　上層遺構（西から）

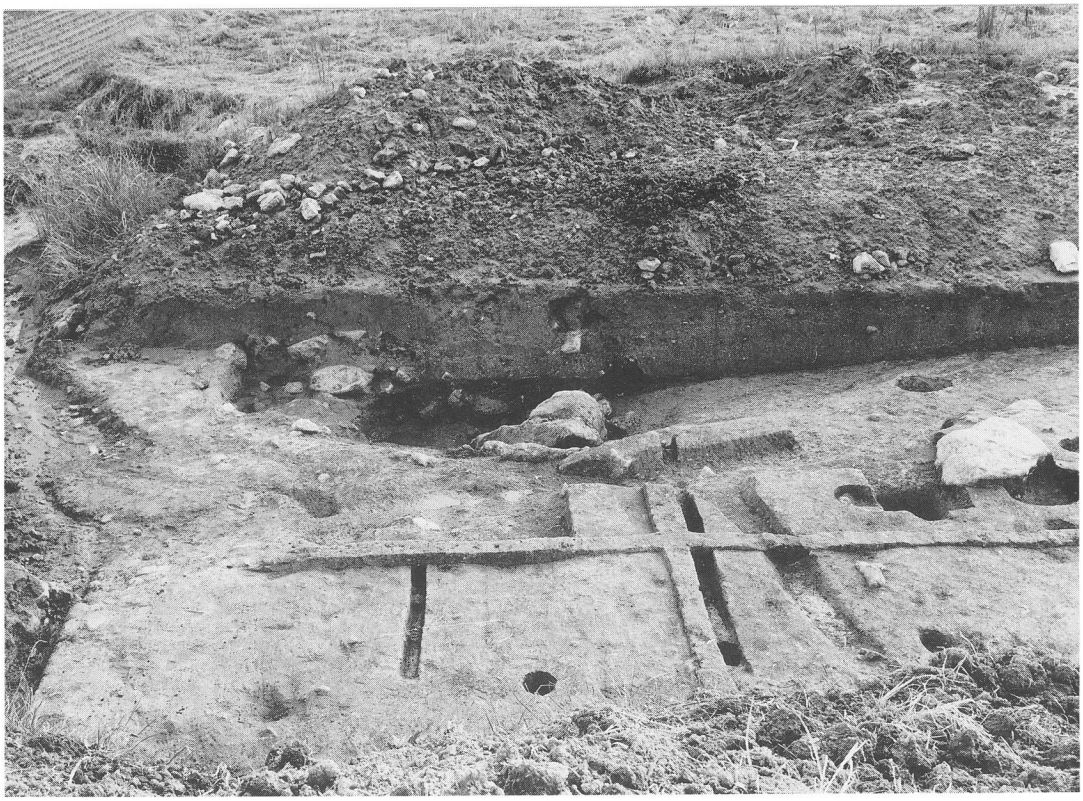
第３トレンチ拡張部　下層遺構（西から）

第３トレンチ拡張部　上層遺構（西から）

第３トレンチ拡張部　上層遺構（北東から）

第３トレンチ　溝０１（南から）

第３トレンチ　溝０３（西から）



第３トレンチ　落ち込み遺構（北から）

第３トレンチ　土坑０１（東から）

図版二〇　戒場遺跡

第5トレンチ（西から）

第6トレンチ（西から）

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書　1991年度

榛原町文化財調査概要　8

1992年　3月31日　発行

編集
発行　榛原町教育委員会
奈良県宇陀郡榛原町大字萩原164番地

印刷　共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号